【昔のガチポケ】さいきょうの砂パン【今はネタポケ】

シュマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【昔のガチポケ】さいきょうの砂パン【今はネタポケ】

【Nコード】
N4976R

【作者名】
シュマ

【あらすじ】
サンドパンになった人が俺tueeeeeeする話し、明らかな作者の息抜き臭が耐えないし、人を選びます。こういうのが苦手な人はポケモンセンターに駆け込もう！
でも実際はこんなに砂パンが強いと周りが使うので、今のままでいいと実は思ってる、そんな感じの話です

よくある一話（前書き）

注意！！この小説には年齢又は服装、所持品、学年、背景その他の人の年齢を想起させる事項の表示又は音声による描写から十八歳未満として表現されていると認識されるもの（以下「非実在青少年」という。）を相手方とする又は非実在青少年による性交類似行為に係る非実在青少年の姿態を視覚により認識することができる方法でみだりに性的対象として肯定的に描写することにより、青少年の性に関する健全な判断能力の形成を阻害し、青少年の健全な成長を阻害するおそれがあるものが

・・・・・ないけど、二次創作なのでそこは気をつけてください

よくある一話

朝、起きるとオレはサンドになっていた。

初めは混乱して近くに居たポケモン（おそらくコラッタ）を攻撃してしまったが、気にしても仕方がないし、気にしない。しかしオレが入っていたであろう卵の殻の近くには親も他のサンドの卵もなかった。これはどういうことなのだろうか？

ボケッとしているとさっきオレが攻撃したコラッタが仲間になりたそうな目で見てきたので、仲間にすることにする。一人は寂しいからね。

さて人を探しつつ、自分を見つめ直してみる。丸いフォルムにキュートな瞳、お腹は柔らかな毛並みで外側は堅い鱗のような表皮をしている。でも他のサンド（いきなり体当たりをしてきたのでやり返したが、覚えたっけ？）との明確な違いを発見した。

なんとオレは色違いであったのだ！だからどうしたという話しだが、少し嬉しいし、個体値も高めらしいので、ポケモンとしてやっていけそうだ。

＋＋＋＋＋

「きゅううううう（ｂｂｂｂｂｂｂｂｂｂ！！！！）」

てーてーてーててててっててーー

『サンドはサンドパンに進化した！！！』

むうう、嬉しくないわけではないが、切り裂くとか覚えてから進化したかったな・・・・・いや周りのポケモン（オレの仲間）が喜んでくれているので、気にしなくてもいいか。

それよりも地震とか破壊光線を覚えないけど、技マシンじゃないと覚えれないし、かといってその辺のトレーナーじゃ、オレの誇り（もうポケモンとして馴染んでいる）が許さないしな。・・・・う～～ん、取りあえず日課のトレーナ狩りでもするか・・・。

＋＋＋＋＋

なにやら近くの街の人でオレが噂になってるらしいなんでも

・赤毛のサンドパンに手持ち６体を６ターンでやられた（サイドン含む）
・そこら辺にいるトレーナは赤毛に一度はセンター送りにされた
・遠征してきたトレーナもセンター送り
・タッグでもセンター送り
・先手を取られた（マルマイン）
・開幕砂嵐＝センター送り
・つばめがえしを（寝てるのに）避けられた
・リフレクターをぶち抜いて一撃瀕死（瓦割り）
・砂嵐が切れたらジャイロボールで一撃瀕死（マルマイン）
・冷凍ビームを耐えた
・勿論そのあとセンター送り

・マスターボールを居合い切り
・昨日はワタルさんがポケモンセンターに駆け込んできた
・負けて泣いてたら喋って慰められた

＋＋＋＋＋

オレが本当にポケモンなのか分からなくなってきた。今なら伝説系とかいわれても納得できる。でも大体事実だから恐ろしい、個体値MAXかつ謎の努力値だと思うけど・・・う～～ん、取りあえずワタルのとこのカイリューの吹雪を耐える練習しに行こう。

はい、突撃隣りのポケモンバトルのお時間です。今日は元チャンピオンのワタルさんの家にお邪魔しますよっと

「あれ？赤毛くんじゃないか、何か用かい？」
「バトルしようぜ！」

オレがそういうとすっごい微妙な顔をされた。何でだろうか？やっぱりカイリューを切り裂く（なぜか毎回急所に当たる）で一撃瀕死したからからか？でもそれは爪とぎしてテンションの上がったオレが踊ってるとき（剣の舞）に来たワタルが悪いと思うぞ

「・・・まあ、いいよ。じゃあ、バトルスタートだ！」
「よっしゃこーー」

おお、最初からカイリュー♀とはね。景気がいいね、ヤル気満々じゃないですか！

『相変わらずマイペースな人ですね』
「砂嵐！っと、なんか言った？」
『瞬殺してあげるって言ったんですよ！！吹雪！！』
丸くなる！グギギッこれはキツイ！砂嵐も相まって前が全然見えないな。《ザザザッ》っ！不味いぞ、まっ守る！
「ふははは！どうかな？吹雪と波乗りのコンビネーションは効いただろう？」
『久しぶりに技の構成を変えたんですから、喜んでくださいね』
「おらぁああ！！！耐えたぞ！ゴラァァアア！！」
「あれ？」
『なんで？』
砂嵐の中から飛び出した俺は転がってカイリューを五回ほど撥ねて瀕死にした。まったく冗談じゃないよ、吹雪に波乗りとか地面タイプを殺しにきてるよね絶対！
「どうやって耐えたの？」
「波乗り読みで守る余裕ですた」
『ふ〜ん、やっぱり砂嵐中だと割り込めないね』
「・・・次はどうしようか？」
『砂嵐を封じましょうよ』
「いやいや、そんなのつまらないよ。新しいポケモンをスカウトしに行こうかな？」
なにやら恐ろしい算段を立ててるようだ、砂嵐封じとか野生のポケモン一匹にする作戦じゃないと思う、切実に

＋＋＋＋＋

こうしてオレの新しい生活が始まったのだが、まさかあんなことになるなんて・・・・

次回、ぱるぱるぅ〜〜！
　　サンドパン海を泳ぐ

さ〜て次回もサービスサービス！

よくある一話（後書き）

前書き飛ばした人、きちんと読んできた人、シュマ！この野郎、本編はどうした！って人お疲れ様です

本編というかネギまのほうは戦闘シーンをどうするか悩んでます

砂パン好きの方は残念でした、砂パンの中身は人です

ころがるはそんなに強くねーーー！！！って方、転がるですよ

それじゃさようなら　しこたま先生は天才だと思う

よくある二話

こちらサンドパン、ただいま不良（ＤＱＮ）に絡まれている
「ぱるぱるぱるう～～（おまえ強すぎでしょ、修正されるね）」
「・・・え、まじですか」
「ぱるぱるうーぱるぱるぱ（殺しはしないけど、ここから出てってもらうよ！）」
「ちょっと待ってください！俺には子供が！」
「ぱる（それ実子じゃないでしょ）」
「ばれました？」
『亜空切断』

＋＋＋＋＋

今日も元気だ飯が旨いとかいってたら、妙に鳴き声がカワイイあのポケモンにどっかにぶっ飛ばされることになった。

《チャプチャプ》

全くオレじゃなかったら死んでたぞ！海の上になんか落としやがって！・・・・ん？オレじゃなかったら、飛ばされないか・・・
しかし今日はワタル達と他の地方に行く予定だったんだけどな、是非ともオレの上位版の地面タイプと地震合戦したかったんだが、しょうがないか、早く陸地行こう。

＋＋＋＋＋

「ぜーぜーぜー、死ぬ・・・」

死ぬかと思ったぜ、ドククラゲとかいないから・・・あれ？って思ってたけど、ここポケモンの世界じゃねえ！

しかも現代日本だよ！任天堂があったらパクリで訴訟されるよ！いやそれよりも先に解剖されちゃう！ううう、船にしがみついて陸に上がったのはいいけど、何気にピンチだ・・・

「くんくん」

むむっ！この匂いは、ドクツルタケの芳醇な香り！大好物ですぞ！・・・・ワタルにどう？っていったら全力で拒否られたのが懐かしいな・・・・変だとは思ったんだよな・・・これ喰ったら毒針覚えたし・・・・仲間でこいつ喰う猛者いないし・・・・でも寝たら気分悪いの治ったし・・・カビゴンなら・・・・。

《もしゃもしゃ》

う〜〜ぬ、やっぱり火を通した方が旨いな。生でも十分いけるけど、量が足りないな。他に何かないかな〜

「う、嘘やろっ！サンドパンや！」

んっ？後ろから声が・・・しまった！見知らぬ少女がっどうする

！？
・辻斬りで口封じ
・圧し掛かりで声を出させない
・メロメロで魅了↑

三番でっ！

「きゅう〜〜ん☆」
「はうっ！」

取りあえず難を逃れたが・・・人目の届かないところで説得しないとな。えーっと、あの林でいいかな

「ふわ〜〜、お腹の毛・・・ふわふわや〜〜」
「それは結構なことだが、ちょっといいか？」
「ああ、いっけっずうっ」

ヤバイなメロメロ効果ありすぎだろ、小学生が腰砕け・・・・この小説が削除されそうだ。この子が落ち着くまで待つか

＋＋＋＋＋

あ、危なかったで！この子が変態さんやったら、児ポ法に引っかかりそうなというか、一話の前書きを速攻で破るところやった！
「どーもサンドパンです。砂パンでもパンくんでも好きに呼んでくれやがって下さい」

「これはご丁寧に八神はやてです。気軽にはやてって呼んでや」
「・・・」
「な、なにか顔についとる？」
「中々可愛らしいですな」
「いやん、そない褒めんといてやっ」

あかんわー、久々に私の動物ランキングが塗り換わったで、大きいワンコと同率首位や。よしっ家に帰ったらサンドを育てよう、

「実は私、色違いなんです」
「そーなん？」
「ここにポケモンないの？」
「いやあるんやけど、私は育ててないから知らんだけや」
「何故？」

すっごいみのり出してきた！堪忍や、私は金銀世代なんや

「・・・・・正直ガラガラの方が強いんよ、というかお宅ポケモン知ってるん？勿論ゲーム的な意味でや」
「サンドパンになる前は人間でした」
「一体なにがあったんや・・・」
「さあ？」

そのあと、なんやかんやあってパン君は八神家に住むことになりました。パン君は人目につくと不味いので穴を掘るで来る様子

次回、やがみけ

何故ｐｉｘｉｖのサンドパンは受けなのか

次回も見てくれないと恩返しちゃうからねっ！

よくある二話（後書き）

しこたまさんをリスペクトしようとした結果が（ｒｙ
やはりあの人は天才、続きが読みたいな

よくある三話

はやての家に居候し始めて早三日、ポケモン世界の地味に殺伐とした空気から開放されていつになくだれていた。これが平和、ふりーだむである

「いきなり襲い掛かってくるポケモンもいないし、次々にオレを捕まえようとするトレーナーもいない、腕試しに遠征してきたポケモン集団も順番待ちのトレーナー共もいない、時々現れるガチパーティなジムリーダーもいない・・・・平和だ」
「なにそれ怖い・・・・ガチパーティってどんなのや？」
「攻撃全振りの骨装備のガラガラとかガブリアス、ギャラドス、キノカッサ、ボーマンダにカイリュー・・・」
「うわあ・・・・あ、カイリュー使うジムリーダーってもしかしてドラゴン使いのワタル？」
「うん」

ううう、にゃろうまさか特殊ボーマンダと耐久カイリューのコンビで来るとは思わなかった。ストーンエッジを何回も耐えやがって・・・

「そうそう、アイツ庭にコイキング用の池があるんだぜ」
「へ～～」
「この前、色違いのコイキング見せびらかしに来たから日本晴れしてやったぜ！」
「あかん！コイキングが干からびてまうてっ」

はやてが悪魔や～って言ってるけど、オレちまたで赤い悪魔（某魔法使いではない）とかいわれてたからな、間違いじゃないないな

「・・・・ＰＣでなにやっとるんや？」
「はやてのドライブを漁ってたんだが、なんだこのＺＩＰの量は・・・どんだけおっぱいが好きなんだよ」
「わたしに恥じる所は無いっ！」
「そこは恥じとけ！」

だらだらとＰＣの整理をしていると動画ファイルまで出てきたが、さすがに危ない気がしたのでヌルーっと、さて今日のランキングは・・・・

「ハッチポッチステーションとは懐かしい・・・」
「グッチさん、というか初投稿でこの出来は・・・」
「期待の新人だな」
「パラスのとこで吹いたわＷＷＷ」

草を生やしだしたはやてを見て確信した、こいつ同類だと・・・・9歳とは思えん

「ニコニコの御三家とは？」
「東方！ボーカロイド！アイマス！！」
「アイマスェ」
「アイマスェ」
「流派！東方不敗は！」
「王者の風よ！」
「全新！」
「系列！」
「天破侠乱」

「「見よ！東方は赤く燃えている！！」」
「おお・・・」
「どやっ」

こいつ・・・・オレと同じく糞ニコ厨（褒め言葉）だ・・・・、将来が心配だ・・・・はっ思い出した！八神はやてってリリなのじゃん！

「サインして！」
「そーいえばヤフオクでサイン詐欺があったらしいな」
「そうそう、オレも騙されたわっじゃなくて！」

そーいうんじゃないです　ちがうのん？てっきり悪の片棒を担げとかかと
はやては一体オレをなんだと・・・・そういや初対面で洗脳？したっけか

「はあ、アニメのキャラやと、私が？ポジションは？」
「三遊間あたりかな・・・」
「バスケだと？」
「ポイントガード」
「名脇役で司令塔・・・・ブライトさん？」

すげえ、大体当たってるよ。あとそのキャラのチョイスは小学生としておかしい、どれ位おかしいかと言うと発売前にブームが去りそうなゲームくらい

「ロボット物？」
「うんにゃ、ロボも出るけど魔法少女系」
「サリーちゃんとか？」

「超火力の砲撃に重装甲、ビグザムですな」
「あかん・・・野太い声のおっさんしか浮かばへん」
「アイテムなぞつかってるんじゃねえ！」
「ぶふうっ！」

お宅にとるなあ　よくこの声でポケモンバトルしてました　なんという野生のボス・・・・・　ジムリーダー涙目である　それよりもトレーナーやろ

「見に行こうっ！そのコ見に行こう！」
「未来の魔王様にか？」
「バーン様ごっこしよう！」
「う〜〜ん、身代わり！」《ポンッ》
「ちっこいパン君や！」
「いきなしテンションＭＡＸだね、我が分身よ！はやてを守るのだ」「あいさー」
《ビシッ》
「か、カワイイ・・・」

３０センチほどのオレを抱えて、翠屋に向かったはやて、一体どんな展開になるかｗｋｔｋが止まらないが、それよりも闇の書の方が気になる。やっぱりあるのだろうか？はやての足が悪いのでほぼ確定なのだが、確認したほうがいいと思う。

そしてはやてはポテチ（コンソメパンチ）を買ってきてくれるのだろうか？

次回、無印完結済み

次もみてくれないと失踪しちゃうぞ

よくある三話（後書き）

うちのはやては自重を忘れた女・・・・
サンドパンがちいさくなるとかへんしんを覚えてくれたら楽だったのにな

よくある四話

数時間もすることが無くなったので、自分だけの帝国を創ろうと穴を掘ったのだが・・・・水道管に下水道、地下鉄にコンクリ、謎の地下道など、明らかに人の手が入っており、こんな所に地下帝国なんかつくったらるるぶに乗りそうだ、などと考えていたが、よくよく考えると地震が多いので無理だと気がついた。

「ポケモン世界でも地震が多かったからな、起こしてたのは主にオレだけど・・・」

しかし何をすればいいのか・・・・・ああ、そうだ確か録画してある深夜アニメが・・・・

「・・・・三期おめでとうございます」

《ズポン♪》

「なんやこれーーー!!」

「あっ、ベーわ・・・・穴埋めなおすの忘れてた」

＋＋＋＋＋

すっごい怒られたわ、まさか幼・・・少女に説教されるとは思わんかった

「それでどんな感じだった？」
「普通の可愛い子やってん」
「なー、でも未来の魔王だぜ」
「どうしてそうなったし」

今のオレは正座ではやてと向き合ってる、骨格的に無理があるのだが、これの御蔭ではやての毒気を抜いて被害（説教の時間と激しさ）を最小限に抑えることができた。今後も使っていこうと思う

「その本・・・・まさか」
「そうだこれが「ギガノレイス！！」いやブラゴじゃないから、黒い魔本じゃなくてこれは夜天の書っていう呪いのアイテム」
「ネクロノミコンとかそんなの？」
「そんなにやばくない」
「ロボが出るのに・・・・」

どうやらはやてはデモンベインのことをいってるらしい、機神咆哮のほうだとは思うが、もし斬魔大聖だったら18禁だから説教だな

「なんやろ・・・・パン君に怒られても怖ないわｗｗｗ」
「ですよねー、でも流石に自重しなさい」
「大丈夫や、おっぱいしか見てないから」
「それは・・う～～ん、どうなんでしょうね」
「セーフやろ？」
「セウトっ！」

――砂パン説明中――

「つまり狂戦士の甲冑やな？」
「はやてのチョイスがやばすぎる、足どころか視覚とか味覚とか

もやられるだろｊｋ」
「主人公（悲）」
「主人公（蝕）」
「ガッツとテッカマンは私の旦那」
「鷹に――されちゃうんですねわかります」
「あうあうあー」
ううう、キャスカさんと幸せになってほしい　禿同、どっちも悲惨だからね・・・でもパックがいるガッツは救われてるカナー
・・・・・その後、二人してテンションがガタ落ちしてテレビをボーっと眺めることに。

「もうこんな時間や、夕飯作るからまってて」
「オレも手伝う」
「その手で？」

はやてがこっちを不思議そうに見てるけど、気にせず爪をポキポキとって見せる。はやては痛ないの？心配してくれたが、全然痛くない、感覚としてはかさぶたを取る感じだと言っておこう

「大丈夫なん？」
「大丈夫、寝たら生えてくる。伸びすぎると危ないし、取ったほうが手入れが楽」
「はあ、あっ！ここんとこの爪の白くなり始めのとこで、取れやすくなっとるんや・・・ポケモン恐るべし！！」
「うんうん、オレも不思議だったこと多かったからー、例えば寝言で、なんでダメージ受けるの？って思ってたら、超毒舌だし精神的にくるダメージだったとは・・・」
「え？寝言って自分の技を出すんやないの？」
「ちゃうねん」

どんなことといったん？　ガルーラにお前の子供いつそこからでんの？とか箱入りにも程があんだろｗｗｗとか　うわぁ、それでどうなったん？　子供のガルーラが（子袋から）出てきてよく分からんけど感動シーンに突入した

「らしい、オレは寝てたから知らん」
「パン君は寝言禁止な」
「大丈夫だ、自主的に禁止してるから」

そんなことを言いつつ、夕食の準備をしていった。夕食はアジフライでした、はやての料理はめし・・・うま、でした

「作文？」
「読書感想文の方が近いな」

次回、はじめてのおつかい
　汚いさすが砂パン汚い

よくある四話（後書き）

ねむる→ねごと→きりふだはロマン技

作者はガルーラにこれといって恨みはないです

よくある五話

今日は火曜日、昼からはやてが病院に行くらしいので、オレもついて行こうと思うが、問題が一つ・・・今オレはサンドパンであった。

この問題を解決すべくオレは考えた。

「人間じゃないなら人間になればいいじゃないっ！」

そうだ！物真似を使おう・・・そう思ったのだが、動物から人になる奴ってザッフィーラとアルフ、猫姉妹しかいない

「アルフは論外、猫姉妹は実質敵？そしてザッフィーははやての誕生日まで待たないといけない」

今はまだ三月、ザッフィーが来るまで三ヶ月ある。まさか原作が始まってすらいないとは、作者の勘違いはひどいな・・・はやては八歳だったし、ということはだ。

「ターゲットはぬこ姉妹か」

原作崩壊もはなただしいが外に出るのがこんなに辛いとは、人のときは思いもしなかったな・・・・・・・おっと来たようだ、はやてが起きる前に来てくれて助かった（現在４時４５分）老人並みに起きるの早いからな

「（影分身をつんでっと）、狩りの時間ですよ」

「っ！誰だ！」
「いいお天気ですね、こんな曇り空はきっとそうありませんよ」
「魔法生物っ！？」

空気が変わった、これは結界か？おお、目当ての人化ですね。物真似できるかな？・・・出来た出来た、もう用はないけど何か話してみるか

「人に変わった？あんたも使い魔みたいね、何か用でもあるの」
「そんなに警戒しなくてもいいんじゃないかな」
「信用すると思う？」

多分、リーゼロッテの方だと思う。今、念話でアリアかグレアムしてんのかな？ドキドキ、噛まないように気をつけよう

「夜天の魔導書・・・いや闇の書をどうするつもりだ」
「あんたっ！なんで知って「ロッテ！黙りなさい！」リーゼ！」
「君が何者かは後で聞こう！チェーンバインド！」

いつの間にかオレの背後に回っていたグレアムがバインドを放ってきたが・・・

「バカめ！それは質量を伴った残像だ！食らえメロメロ！」
「何！？」
「えっ嘘！？」
「うわっ！？」

メロメロの効果ははやてで実証済みっ・・・・ノリでやってしま

ったが、どうしようか

＋＋＋＋＋

「（右手にお玉を、左手にフライパンを、横たわりし者に正義の鉄槌を、唸れエルロン家秘技　ポソポソ）死者の目覚め～～～」
「ぐぎゃーー！！・・・・誰やその人達？」

はやてに説明してみた↓オレがメロメロにした、おっさんは知らん↓何故そんなことを、そしておっさん不法侵入な件↓実はペルシアンが好きなんだ↓タイプ一致切り裂くですね分かります

「最後の関係ないやろ」
「ばれたか」
「ばれないでか、リビング行っときお茶出すから」

メロメロになったぬこ姉妹をねこじゃらしで遊びつつ、シリアスモードに切り替えることにする。おっさんはメロメロにならなかったけど、アイフルみたいにキュンときていて戦意は無くなってる。
はやてに原作を語らねばならないらしい

「この人たちは、時空管理局の人だ」
「上着のポケットに手を・・・」
「それは時空のおっさん・・・・ん？次元漂流者を保護してもとの世界に帰す、そして魔法の記憶を消す、でもおっさんに逢った記憶が残ってたとしたら」
「ＮＯＢＯＤＹ」
「おっさああああんん！時空のおっさああああああああああん！」

「そんな期待した目で見られても困るんだが」

次回、作戦会議

シリアルモード

予告の必要性？Ｌしってるか？ディスガイアの予告のことを

よくある五話（後書き）

オカ板にて時空のおっさん
ペルシアン使ってました、サンドパンは金銀からです
いまでは砂パン厨と呼ばれれます
しかしバトルは弱かった！相手は厨ポケ好きしかいないから仕方ないね！

よくある六話

リビングは静寂に包まれていた、はやてに全てを（なんとか）語った俺たちは（珍しく）真剣なはやての言葉を待っていた

「グレアムおじさんが私のあしながおじさんポジションで、わたしを夢想封印することを企んでいたのは分かった」
「すまないというのは、偽善だね・・・」
「「お父様・・・」」
「はやてはどう思う？」

非痛そうにするグレアムとアリアとロッテ、さっきまではこれまでの苦悩を吐き出すように、はやてに自分達の計画やそれに至る切っ掛け、夜天の書について洗いざらい語った。オレたちのじゃれあいを遮ってまで語った話には、オレには分からない痛みが見て取れた

「ん〜・・・・・わかんねえ・・・」
「保留だっーーーー！！！」
「なっ！」
「「えっ！」」
「「ハッピハッピフワッフゥ〜！」」

一気にテンションが上がってしまった、はやて恐ろしい子っ、やっぱり俺たちにシリアスは向いてなかったんや！

「決定だなっ」
「決定やっ」

「「八神家へようこそっ！」」
「・・・どういうことなんだ」

＋＋＋＋＋

多少の混乱はあったけど、メロメロでなんとかなったわ、こいつらちょろいわ。ということで五人で朝食を摂ることに

「うん旨い！はやてはイイお嫁さんになるぞ！」
「もっと褒めてや！おかわりいる？」

「・・・負けた」
「アリアのより美味しい！」
「はは、アリアのに負けないね」

約一名落ち込んでいるけど、おおむね好評の模様。人が増えて嬉しそうなはやてでメシがうまい。
さっきの話は、はやてがグレアムたちのことを良く知らないので保留して、しばらくの間一緒に住んで互いに理解を深めた上でもう一度話し合うことでまとまりました。

「さっきの話しだが、君はそれでいいのかい？私が憎くないのかい」
「はやて」
「・・・何？」
「君やのーて、はやてって呼んでや」
「・・・はやて」
「うん♪別にええんや、まだ何かされたワケでもないし」
「だが「ええんやっ！」」

はやて・・・・複雑そうだな、しかし爪が伸びたせいでお椀がもちづらい・・・折るか
《ポキポキ》ん？ああ、三人は初めて見るから驚いてるな。まあいいか、これで味噌汁が飲めるな

「パン君の空気の読まなささが好きや」
「ありがと、で今後のことなんだが、原作だと騎士たちは募集を始めて闇の書が完成する」
「バットエンドなん？」
「いや管制人格を闇の書から分離してからなのは様が倒した、でも管制人格が残ってると暴走してる部分が再生されるから結局管制人格も消えた」
「なんとかならん？」

難しいと思う、専門じゃないからなんともいえないけど、でもどこかのオリ主が何とかしてくれるかもしれないな。三人がついていけてないな、ほっておこう

「でもはやての病気を治すアイデアはあるぞ」
「ほんまに？」
「ああ、はやての病気の原因は闇の書が魔力を吸って身体に負荷をかけているかららしい、なら外から供給できればなんとかなる。使い魔契約などを活用して魔力を逆流させれば可能だと思うぞ。グレアム、オレのリンカーコアの用量はどれ位なんだ？」
「AA＋だ、確かに理論上は可能か？それよりもなのは様という人物が気になるのだが・・・」
色々聞きたそうなグレアムたちを無視して契約の準備を進めさせる、グレアムは成功するか不安そうだったが、大丈夫な気がするの

で気にしない。

＋＋＋＋＋

「でや、契約って何するん？キス？」
「キスだったらでぃーぷに行くぞ」
「・・・そこに立ってるだけでいいからじっとしてなさい」

はやてはオレがでぃーぷなのっつった瞬間にツインテールにしようとしたが長さが足りなかったようだ、流石だネタにつっぱしる女！そこに痺れるあこがれるう！

「・・・成功したみたいだよ」
「ん〜〜？足がぽかぽかしてきた？」
「ＰＰが減った気がする」

すぐには効果が出ないみたい、歩けるようには筋力が足りないようだ。しばらくはリハビリに励むことになりそうだ・・・眠いし二度寝しようか

よくある六話（後書き）

地震べーわ、原発は大丈夫なのか？

よくある七話

今回、天狗じゃぁ！天狗の仕業じゃぁあっ！
　はいはい、ワシのせいワシのせい

「・・・って何でですか～」

・・・あれ？はやてのボケに突っ込んだ気がしたんだが・・・誰もいない、どうやら寝すぎてしまったみたいだ。枕元にははやての書置きを発見した

『パン君へ、前略―――中略―――後略
　ＰＳ布団を干しているから日本晴れして置いてや』

なんということだ、略しすぎてＰＳしかないじゃないか。とりあえず日本晴れしてと、いい天気だから外に行こう

「へへへ変身！ファイナルガンバライド、うむいい感じだ。これなら外に出てもばれないだろ」

えーっと、二時か。はやての診察が終わった頃か？・・・はやての嬉しそうな波動を感じるし、多分良くなってるとみた。

＋＋＋＋＋

「ラブプラスをアーケードでやる意味はあるのだろうか？」

「ん～？オレは格ゲーがいいっすね」
「君は馬鹿だな、このオレに格ゲーを挑むなんてっ、よかろう！
鉄拳タッグトーナメント2で相手をしてやろう！」
「連コしていいっすか？」
「ここは連コ禁止です」

ヤガミが下段を読んでっ、捕まえたぁっ！ヤガミが交代読んでっ、
まだ入るぅっ！ヤガミが画面端ぃっ！ヤガミが決めたぁっ！

「オレが最強の格ゲー王、ＹＡＧＡＭＩだ！もう一度やるか」
「まさかの五十連勝だとっ」
「これ強キック利かないですけど？」

ふう、腹減ったな。さっきの奴は一体？ノリのいい奴だったから
アドレスを貰ったけど、名前を聞いてなかったな。さて翠屋でご飯
を食べて帰るか

「いらっしゃいませ～」

むむっ、この店員・・・・なんだろう幸薄そうだ。そんなことよ
り、メニューはっと・・・・・菜の花サンドか、期間限定とな、なら
ば他のまざる得ない！

「かしこまりました～」

・・・うまいな、てっきりなのはと掛けたネタメニャーかと思っ
たんだが、これはオヌヌメ！はやてに教えないとな
「あの～、お口に合いませんでしたか？」
「あっいや、そんなことありませんよ。美味しいですから、シェ

フを呼べっ！って言いたくなるくらいです」
「良かったぁ・・それ、私が作ったんですよ」

話し込んでしまったな、早く帰らねば、はやてが待ってる気がする。でまたアドレスを貰ったんだが、はやてにPCを借りるとしよう、携帯を持っていないからな。

「ただいま」
「おかえりって誰やっ！」
「くくっ計画通り」
「キラかっ！・・・そっくりやん、どしたの？それ」
「物まね↓変身↓八神月誕生」
「おお、死神になってっ！はい！リンゴ！」
「はやて知ってるか？死神はリンゴしか食べない」

＋＋＋＋＋

その頃の高町家

「お父さん聞いてっ」「父さん聞いてくれ」「お父さんお父さんっ」
「んっ、なんだい？」
「八神さんって人と仲良くなったんだよ」
「八神って奴と親しくなれた」
「はやてちゃんって子とお友達になったの！」
「「「あれっ？」」」
「良かったね」

よくある七話（後書き）

なぜだろう高町家の人は友達が少ないイメージがあるんだが、そして恭也の性格が愉快になってしまった

そしてこれ以上長くするのは（ネタ的）無理があった、はやてがいないと難しい

よくある八話

今回、また次回を入れ忘れた
春は変な人がでる

「パン君、ちょっと話があるんやけど」
「今、よわっちい恭也にコンボ指南してるから後でいいか？」
「私思うんや」

無視された、はやてだからしょうがない・・・・まあ恭也なら放置しても大丈夫だろ。しかしはやてが真剣な顔をしてるが、嫌な予感しかしないな

「パンチラは恥じらいがあるから興奮するのであって、決して下着に興奮しているわけじゃないって・・・」
「・・・ん？」
「だから羞恥心が見え隠れするのがいいのであって、スカートの中がどうなっていようと！ブルマだろうがスパッツでも短パンでも私はいいと思うっ！」
「お兄ちゃん、くるぶし派だからよく分かんないな」
「なん・・・だと！？何故だっ何故理解できんのだ！」
「ボウヤだからさ・・・」

最近、あったかくなってきたからな～、変なコが出てきた。まあ、分からなくもないが此処は保護者として諌めないとな

「つまりはやてはこう言いたいわけだ、スカートめくりしに行こうぜって」
「うん」
「素直でよろしい」
「なーなー、行こうよ～」
「しょうがないな・・・」
「やたっ！」

＋＋＋＋＋

作戦はこうだ、オレが会話などで引き付けている間にはやてがめくる　王道やね、だからこそ成功しやすい　うむ、では行こう　ロマンを求めてや！

ターゲットその一　リーゼアリア
前情報　真面目っこ　ネグリジェ　ロマン度高

「おはよう、アリア」
「あ、おはよう・・・さっきはやてちゃんと何してたの？変なこと教えてないわよね」
「安心しろ、あいつは元から変な子だ（今だ！）」
《クイッ》
「カニミソッ！」
「へっ？・・きゃーー！！」
「逃げるぞはやて！（黒だ）」
「合点しょうちのすけ！（大人やね）」
「ちょ、待ちなさいっ！」

ふう、思ったより破壊力抜群だったな　パン君私としては２つ星は確定だと思うんやけど
そうだな、黒だったからな　黒やちょい透けの黒や　確かにロマンはそこにあった

ターゲットその二　高町美由紀
前情報　眼鏡っこ　制服　ロマン度中

登校中の美由紀がターゲットだがいけるか？はやて　任せとき私の車椅子は１０８式まであるで！　よく分からんがすごい自信だ

「おはよう、美由紀」
「おはよう、ライト君珍しいねこんな時間に会うなんて」
「ゴミを捨てにきたんだよ（今だ）」
《クイッ》
「今夜はパスタ♪」
《スカッ》
「ごめんね~私先生に呼ばれてるから急がないと~あとはやてちゃんスカートめくりは駄目よ~」
「避けられたな、武術家なのを忘れていた」
「でも気にしてへんのは何でや？」

華麗に避けられてしまったので二人して黙り込んでしまった。

「・・・走っていく女子・・・風や動きでちらりと見えるふともも・・・見えるか見えないかギリギリのパンツの瀬戸際・・・はっ！これはパンチラ！？」
「・・・俺たちのやってたことはあくまで人工的に作り出したも

のだ、天然にはどうしても敵わない点がある」
「それは！？」
「俺たちのはパンモロというのだ」
「せやね、なのはちゃんにもしようかと思ったけど、もうええわ。わたしは満足や」

新学期に入って俺たちは何をしているのだろうか、もう四月だ、原作が始まるのに・・・俺たちは！　私達は朝っぱらからこんなでええんやろか？あかん！レゾンデートルの崩壊がっ

悶えながら家に帰ると青筋を浮かべたアリアにこってり怒られました

次回、原作介入作戦
空気を読む闇の書

よくある八話（後書き）

これはひどいｗｗｗ

基本的にひらがなにしたら、えろく感じないか？ぱんつ、ねぐりじぇ、すぱっつ、ぶるま

何故ロッテがいないかって？うちのロッテは短パン装備だからです

こんなバカなＳＳですが読んでくれたらうれしいです

よくある九話

今回、今回は真面目だよ！

「被告八神はやてには、三日間ＰＣ禁止の刑に処す」
「そ、そんなぁ、堪忍してや～～！！」

まったく！本当にはやては自重しないと、将来が心配でしょうがない、どこの世界にビデオ屋のＡＶコーナーについてくる子供がいるだろうか？ここにいたわけだが、まさか

「いつ来てもここの雰囲気はえーな～」

というとはおもわなんだ、１０年早いわ！まあ、１０年経ったら一緒に行こうと約束したわけだが、まさに変態という名の淑女だ

＋＋＋＋＋

「最近、シーシェパードが調子に乗ってんのや！」
「いまさら何を言うかと思えば、いつものことじゃないか」
「なにがっ！『私は日本の地震・津波が全てのイルカ漁漁船を飲み込むことを願ってます！』や！今回の地震でイルカも鯨も沢山死んでるやないか！どないやねん！」

なにを今更なことをそれが商売だから仕方ないだろう

「大体っ！イルカもイルカやで！勝手に網食いちぎったり横取りしたり、私達（海岸の人）が陸に打ち上げられたとき、海に返したり命を助けた恩を仇で返しおってからに！」

「どうどう、はやてもちつけ。いいコピペを教えてやろう『シーシェパードは善意を食い物にする』」

「サンドパンに言われると何かぞく！ってしたわ、それと今日は鯨の刺身やから」

「あいあい」

冷静になってなによりだ、流石のオレも素で引いたからな。鯨の心配しろよｗｗｗとか思ったもんだ、さて美由紀に返信しないとな『はいてません』っと・・・はやてが覗き込んできた

「そういやパン君って外出るとき、変身してるから実際は服着てへんよね？」

「で」

「どんな気分？やっぱ興奮する？」

「フヒヒ、見られてると我慢汁がって、アホか、このふさふさの毛が目に入らんのか」

「ふわふわの毛に包まれた柔らかな脂肪、その奥に潜む硬い筋肉・・・ぱーふぇくと、完璧な肢体やで・・・・」

「エロマンガみたいだな」

「絵と画の間に浪漫を入れたらエロマンガになるんやで～」

だからなんだというのか、おっと美由紀から返信だ『じゃあ、私も脱ぐね！』・・・・何故？なんで美由紀が脱ぐのかわからんが『私は一向に構わん！あとはやてがＡＶコーナーに入ってきた』っ

と送っておこう
「あ～パン君と話してるとよく分からん方にいってまうな」
「はやて、いいことを教えてやる、ローターを電源を入れて机に置くとどこにいくかわからないだろ、な？」
「残念ながらその手のものは持ってへんで」
「誰も期待していないが」
「！？」

なんかすごい顔で驚かれたが、俺はロリコンではない守備範囲が広いだけだ。あっ美由紀から返信だ『知ってるよ』なん・・・だと、アイツ高１の癖に・・・いや待て焦るなとりあえず返信だ『どういう状況だった？』これでよし

「巨乳ってすごい揺れたやん」
「あれは凄かった、初めて日本に生まれてよかったと思った」
「不謹慎やと思わん？」
「お前の頭が不謹慎だな」
「褒めんといてや」

褒めてない、おっ早いな美由紀から返信が来た『う～んとね、私が近親『服着て今すぐこっちに来い！』』まったく最近の女性は淑女すぎる

次回、おっぱい↓いっぱい↓いい気持ち！

よくある九話（後書き）

別に他意はないデスヨ？

おっぱいに貴賎は・・・え？違うって！作者は鎖骨派だから！

よくある十話

廃墟と化した海鳴市、サイレンが鳴り響き、瓦礫を踏み先を急ぐオレを追う、砲撃の音が徐々に距離を詰めてくる
爆風と爆音の間にかすかに聞こえる声

「イオ～ナズむ～街の～」

炎が燃え移り、火の海が広がっていく、煉獄が行く手を遮り、遂に追いつかれる
熱風が身を巻き、汗が吹き出る、塵が燃え風を焼いていく

「メラ～ミとバギの～なか～」

バインドで捕まった俺は彼女と対面する、上空から降りてきた彼女は俺を養豚所の豚をみるかのように冷めた目で見下した
バインドがギリギリと音を立てて体が引き裂けそうなほど強く縛ってくる

「ザギ～逝く～貴方へ～贈るイオラ～」

彼女が突きつけてきたレイジングハートから閃光がほとばしる

＋＋＋＋＋

「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」
「！？なに！何がっあったん！」
「・・・っ！・・・・けつばんと互角だった」
「どういうことだってばよ？」

色々と黒いなのは様に星砕きをされてしまう夢を見た、恐ろしい・・・よし決めた！彼女を更生させてみせる！手始めに正しく魔法少女にしようか『誰か・・・たす・・け』ちょうど良くユーノが助けを呼んできたな、明日が原作の始まりか？

「なーなー、なにかロマンあふれるこというてや」
「めくってみるまで、パンツをはいてるかどうかは確定しないスカートの中、これをシュレディンガーのぱんつという」
《ガタッ》
「・・・立つなよ」

＋＋＋＋＋

翌日の夜、恭也からメールが来たんだが・・・
『（ ´_ゝ`）＜今、なのはが外に出て行ったんだが』
・・・なんでこいつメールしてきたんだろうか？
『（ ´_ゝ`）＜何故おまいはそこにいるんだ？』
『（;´Д`）＜でもＦＰＳやめられないんだけどｗｗｗ』
こいつは・・・まあいいか、俺が行くことにしよう、それとＡＡがむかつくわ

「はやて、オレちょっとバトってくるから」

「私もいってええ？」
「まあ、いいと思うよ」

はやてを抱えてユーノがいるであろう病院近くへ向かう

「パン君、今サンドパンやで？」
「何を言う元からオレはサンドパンだが」
「そうじゃなくてな、変身せんでええの？」
「ああ、あの姿だと体当たりしか出来ないからな」
「じゃあ、私はトレーナーな！」

何がじゃあなのか分からないが、許可しよう。

＋＋＋＋＋

誰かに呼ばれた気がして病院まできたらフェレットが喋って、なんか大きな犬？に襲われたの

でもそれよりびっくりしたのは

「行けっサンドパン！切り裂くだ！」
「貴様ぁ、楽しませてくれるんだろうなぁ？」

最近お友達になった、はやてちゃんがサンドパンのトレーナーだったことなの

「グエエエ！！！」
「追い討ちだ！サンドパン、地球投げだ！」
「虫けらが…いつまで寝てんだ！起きろっ！」

大きい犬？よりも若本ヴォイスのサンドパンのほうがよっぽど恐ろしいの・・・

「なのはっ！チャンスだ、セットアップしてジュエルシードを封印しよう」

ユーノ君・・・しなくてもいい気がするの

次回、若本サンドパン＝八神月

よくある十話（後書き）

なのは様誕生日おめでとう！
サンドパンが見た夢は私が見た夢に歌詞をつけたものです
なお、うちのサンドパンはオレ無双し始めると若本ヴォイスになる仕様です

よくある十一話

ジュエルシードが創った大きな犬?を皆でフルボッコにした後、オレ達は近所の公園で自己紹介することになった

「パン君!ボールあったからサッカーしよ!」
「オレの超次元サッカーが見たいと申すか」
「ちょっと待ってなの!それも見てみたいけど、まず自己紹介をしようよ!」

オレが五条さんばりのディフェンスを披露しようしたが、怒られてしまった。オレならあのサッカーを再現できるのだが・・・待てよ?魔法使いと一緒にやるのも面白いか

「———だから僕が悪いんです・・・」
「そんなことないよ!」
「せや!うちのパン君ならちょちょいのちょいやで!」
「ん?ああ、そうだな」

やばい聞いてなかったな、でも大丈夫かユーノの独白だし

「じゃあ、私達のターンやな!私は八神はやて!最近、生活に張りの出来てきたピチピチの八歳や!」
「そうだよ!なんで立って歩いてるの!?一昨日まで車椅子だったのに!」
「エロスが私を奮い立たせたのだよ」
「それ、そんなに上手くないぞ。次はオレだな、オレはそこのユ

ーノのジュエルシードと共に船で運ばれてきたサンドパンという種族だ、気軽に砂パンでもパン君と呼んでくれ」
「サンドパンなんだ！やっぱりサンドパンなんだ！」
オレの嘘にまんまと突っ込んでしまう　なのは、君はなんでツッコミが上手いのさ・・・今度はやてと漫才でもさせてみるかな？
いや、もしかしてはやてと遊ぶようになったからこそそのツッコミなのか？

＋＋＋＋＋

「へえ〜、次元世界にはポケモンの棲む世界があるんだ」
「ああ、だけどな、オレみたいな色違いは価値が高いから他の世界の金持ちが欲しがるんだよ。」
「そうなんですか・・・」
「うん、ユーノも気をつけろよ。需要はいくらでもあるんだからな」
「はあ・・・？」
「そうなの！ユーノ君はしゃべるフェレットとして珍獣扱いされるかもしれないの！」
「・・・なのは、僕は人間だよ？」
「えっ！？」
なんだが知らないが、段々話しが逸れてる気がするな・・・暇だし帰るか、何かあったらユーノが知らせるだろうし
「じゃ、俺たち帰るから、あとなのは、恭也に『お兄ちゃんなんてだいっ嫌い！』って言っとけ」

「えっ！？了解なの！」
「そこは了解するとこなんか？」

さて帰って恭也のブログでも荒らすかなー

＋＋＋＋＋

「パン君！スパッツとブルマどっちがええ！」
「ぱんつ！はやてはブルマみたいだな」
「なんで分かったし！」
「わからいでか、その今穿いているブルマが何よりの証拠だ！」
急になんだと思ったらブルマ談義がしたい模様、全く歩けるようになったからすっかりアクティブになりやがって、いいぞ！もっとやれ！

「言って置くが、俺はブルマにはうるさいぞ？」
「望むところや！私はシャツはブルマに入れる派や！」
「うむ命題の一つだな、確かにシャツを入れたほうがブルマの見える表面積が増えてお得・・・もといどことなく幼さを演出できるだろう、しかしだシャツを出したときの利点は何か分かるかね？」
「・・・へそ？」
「見えたら最高だな、だが現実はそう甘くはない、俺が思うにシャツを出してる人はすべからく羞恥心を感じているはずだ。」
「はっ！男子に見られて恥ずかしがっている少女が見えるだとっ・・・」
「体操着やジャージの裾で隠せば、より感じるわけだ。彼女達の恥ずかしさがな」

「はうっ、ぴっちりはっピッチリしてるのはっどう思いますかっ！」

「はやては典型的なブルマーだな、元々ブルマの丈を短くピッチリとさせたのは女子の要望によるものだ、つまり機能美なわけだ。男の欲望ではなく、より運動しやすいように考案された、あるいみゼロ戦のようなロマンがそこにある。」

「ブルマにはロマンがあると・・・」

「オレはジャージでも興奮するがな」

「色はっ！色は紺がいいと思いますがっ！」

「そう焦るな、そうだなブルマといえば紺、ついでエンジ色だな。あのセンスには脱帽だな、スポーティな横線もいいと思うな。」

「なんであんなに肌が映えるやろうか？」

「それは肌が白く、紺やエンジが暗めの色だからだな。それに紺は落ち着いていて肌を白く浮き上がらせるし、エンジは周囲の肌を赤く見せることができるな。」

「つまりブルマに最適だったと・・・」

「オレは黒でも白でもいいがな、日焼けた肌に白いブルマは新鮮な感じがしないか？」

「た、確かにっ！あ、あかん！パン君も相当な変態やった」

失礼だな、これが普通だと思うぞ？皆もそう思うだろ？

次回、すぱっつ

よくある十一話（後書き）

いつもよりちょっとだけ長い感じ
ブルマについて思うことをあげてあったら収集がつかなくなったんで
切ることに、またそのうちにブルマ（食い込みとか）の話しがしたいなあ
　作者は短パンがいいと思うな！

よくある十二話

＊今回は男回です

「８０１板の住民が最強すぎて困る（（（　；゜Д゜）））ガクガクブルブル　」
「よく生きて帰ってきたな（´・∀・｀）」
「君たちは何の話をしているんだ」

現在、俺の部屋で男三人、茶をしばいてる。茶をしばくってすごい言葉だよな、はやてがつかってるけど

「さっきはやてが買い物に行ってきたんだが、その時ついでにグミ具体的にいうと赤いグミを頼んだんだが・・・今目の前に牛乳がある」
「中身実はグミなんじゃないか？（´－｀）フーン」
「その顔やめろ」
「・・・めグミみるくか」
「（；・｀Д・´）ナ、ナンダッテ」
「だからその顔をやめろというに」

謎が解明されてしまった・・・はやてめ小癪なまねをっこの話して一話丸々つぶすつもりだったのに

「そういえば昨日はライトが買い物にいったらしいが」
「あっ、そうそう、昨日オレがコメ２０キロを買って玄関に置い

てたんだけどさ」
「（゜Д゜≡゜Д゜）エッナニナニ？　さっきの話は？」
「君は黙ってなさい、で続きは？」

「んでロッテが台所に運ぼうとしたんだが、足を滑らせてコメをバックドロップしてロッテは頭から床に落ちていった」
「（ノ∀`）アチャーおコメ大丈夫だった？」
「恭也くん、他にいうことは？」

「Σ（゜□゜；）ハッ！！床は大丈夫！？」
「落ち着けグレアム、これはわざとだから」
まじで煽るの止めてくれよ、今グレアムがデバイスに手をかけたぞ。

＋＋＋＋＋

ビールやら酒を飲みながらゲームをしてるんだが

「ポリンキーはうまいけど、美味しさの秘密を探りにいった友達は帰ってこなかった・・・（ー、ωー）」
「あ、あそこはそんなに怖いところなのか・・・」
「グラハムも命が惜しかったら探るんじゃないぞ」

皆いいかんじにアルコールが回ってきて話しが変な方向に曲がっていってしまう

「そういえば本物のモグラって見たことある？（´・ω・｀）」
「ないな」

「土の中で見た、めっちゃ遅いのと異常なまでに早いやつがいる」
「お前・・・土の中に潜って何してんのさ・・・（´Д｀）」
「三人行動してるやつは本当にヤバイ速さ」

だからぽろりといってもいいよね？

「お前の妹、魔法少女だぞ」
「（ ﾟДﾟ）ハァ？」
「おお、彼女かログで見たが凄かったな、恭也くんも見るかね？これだよ」
「（ ﾟдﾟ）ポカーン・・・・ああ、なるほどな」

どうやら恭也も薄々気づいていたようだ、真面目な感じに戻ってきたが、違和感しか感じないな。

「やっぱりな、だってフェレットに話しかけてたり、頻繁に外に出歩いたり、妙な玉に話しかけてたり、魔法少女みたいなカッコで鏡をみてたりしてたしな。てっきり変な男に引っかかってないか心配だったけど・・・・魔法少女ならしかたないな」

・・・・まあ、フェレットのなってる変な子に引っかかってるけど、それはいいますまい。

次回、運命の子

俺）　先生・・・・AAをもっと使いたいです・・・
友）　ケイタイで見てる人がいるのでだめです、次回もよろしく

よくある十二話（後書き）

たぶんネタが尽きたらこれ終わります
気がついたら終わってたり、これからだエンドです
A，ｓまではやりたいネタがあるのでやりますが
ｓｔｓはやらないと思います

よくある十三話

「なーなー聞いてーな、前にスカートめくりされたんやけど」
「今の時代にそんな猛者がいるのか」
「やっ、私も驚いたけどそこはええねん。で私もお返しにズボンを下げたのはええんやけどな、一緒にパンツまでさげてもーて、その子学校に来なくなってな、どないしょう？」
「ほっとけ、あと俺もほっといてくれ」
「なんで？」
「棘の生え変わりが始まったから」

足がすっかり良くなったはやては学校に嬉しそうに行ってる、なのは達とは違い公立の小学校だけど楽しそうでなによりだ。しかし色々はっちゃけているはやてでは問題をよく起す、例えばさっきのスカートめくりの少年の親がこちらに言い掛かりをつけてきたり、俺が担任の教師に呼ばれるのも多々ある。

全部なんとかなったがな

＋＋＋＋＋

「右！左！ほらほらきびきび避ける」
「うわっうわわわっ！」
「足元がお留守ですよっと」
「はうっ、う～いたた」

平日の朝、なのはとの戦闘訓練が日課になっている。主に近接を教えている、元もとの素質がいいのか、動きがかなり改善されてきた。ちょっと前にフェイトに負けたことが悔しかったのか熱心に訓練しているのも要因の一つだ、やる気がすごいうちのはやてに見習わせたいものだ

「全然当たらないよっ！」
「ほれほれ、そんななまっちょろいバインドじゃ、俺を捕らえることはできん。避ける俺の動きを予測して、逃げ道を削るようにな。絶対に動きが止まるときがあるから見極めろ！」
「無理だよ～」

ユーノが張った結界の中を縦横無尽に駆ける、なのはの死界から死界へ、時折視界に入りつつ挑発する。それでもなんだかんだで、俺の動きを読み始めていく、なのはは天才の部類だな

「二個でいいのか？」
「いいからっ！」
「三個か？三個欲しいのかっ！三個・・・このいやしんぼめ！」
「はわわー！」

シューターで空き缶を落ちないようにお手玉させる、これが中々難しいようで一個増やすだけでかなり難度が上がるそうだ。こういう魔法系はレイジングハートとユーノが見ているので、俺は適当に遊ぶだけの簡単なお仕事

「死ぬっ！死んじゃうよ！」
「大丈夫だ、死ぬ死ぬいってて死んだやつを俺は見たこと無いか

ら、遠慮なく死ねぇえええ！！ストーンエッジ、岩石封じ、岩雪崩！」

「全力全開で守るのっ！」

【ｙｅｓ　ｍａｓｔｅｒ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ】

「縮こまってるんじゃねぇ！ぶち抜くっ！瓦割ぃ！」

さーて今日もいい汗かいたなー、固めて防御を抜く、いい仕事だ。

魔力切れ（俺との競り合いなどで）のなのははユーノに任せてうちに帰るとしますか

＋＋＋＋＋

「パン君、なのはちゃんを鍛えてどないするんや？普通は魔王化阻止したり、ハーレム入りさせるもんやないの？」

「いや、将来的にはなのはの名前を聞いただけで犯人が自首するレベルに持っていく」

「そこまでいったら何て呼べばええんやろか？」

「超魔王なのは」

「レベル６０００は固いな」

いつかなのはも若本ヴォイスになるのだろうか・・・今度セガールアクションをマスターさせてみるか、メシウマ。

現在のなのは　ステータス（ポケモン風）

レベル３　魔法少女見習い

体力　１７

魔力量　ＡＡＡ

攻撃　８
特攻　１５２
防御　５
特防　　１３４（２３）
素早さ　３２（８）

体力、攻撃、防御はなのは自体の純粋な身体能力なので、大きく変動はしない。特攻はなのはの砲撃魔法の強さ、特防はプロテクションなどの防御魔法の硬さ（）内はバリアジャケットの性能、素早さは飛行魔法の機動性（）内はなのは自体の足の速さです

ついでにサンドパンのステータス　特に本編には関係ないが各パラメータの努力値はマックス（この辺が地味にバグ性能）

レベル１００
ＨＰ　　３５３
攻撃　　２９８
防御　　３１８
特攻　　１８８
特防　　２０８
素早さ　　２２８
ド根性　＋７５

特性は砂かきと砂がくれの両方持ち、そのため砂嵐を出したらハイパーサンドパンタイムへ、根性は体力が三割を切ると防御と特防に追加される数値、やったね、パン君！硬くなったよ！

よくある十三話（後書き）

べ、別にモンハンの火事場とかじゃないんだからね！
あと友達から言われたけど　１１話は酷過ぎっていわれた、反省はしてるけど後悔はしてないから自重なんてしませんよ

よくある十四話

朝起きるとアリアがはがきを振っていた。なんだかよくわからなかったので聞いてみることに

「アリア何してるんだ？こんな朝っぱらから」

「ああ、サンドパンさんこれはですね。雑誌にそうするように書かれていまして・・・これですよ、これ」

そこにかいてあったのは、『ふるってご応募ください！』・・・なるほどね。つまり奮ってを振るってと勘違いしてるわけか、ここで黙ってるのもいいが、可愛そうだ。振り終わったら教えてあげよう

「はあはあ、これぐらいでいいかな？じゃ！ちょっと投函してきます！」

「あっそうそう、このふるってっていうのは積極的にっていう意味だから」

「っ！？／／／」

こっちを睨みつけた後、勢いよく逃げ去っていった。たっぷり三分アリアが頑張っている姿はとても微笑ましかった。

「パン君、朝ごはんできたで～」

今日もいい一日になりそうだ

＋＋＋＋＋

現在、うちに俺のほかにもう一人いる。その子は金髪で全体的に黒っぽいコーディネートで口下手で魔法使いで、なんというかなのはのライバルのフェイトです。

ちゃぶ台を挟んで二人きり、片方は土下座して片方は腕を組んで目をつぶってる。

「うちのアルフがすみませんでした」

「・・・・・。」

「あの・・・その・・・うう・・・」

「・・・・・。」

俺は静かに窓を見る、外には日に当たって気持ち良さそうに寝ている狼がいた。なぜこのようなことになっているかというと、原因はアルフにある。

今日俺はいつものようにコンビニでアルバイトをしていた、はやてが学校にいったあと出勤そして帰りにはやてと合流して買いものに行くのが普通なのだが、今日は違った。

「あんた！魔導師か！」

突然、女性が殴りかかってきたのだ。つい俺はカウンターで返り討ちにしてしまった、しかし偶然にも店内には俺とアルフだけだったので休憩室に寝かせることにした。

その後、交代の人が来るまでアルフが起きる↓カウンター↓休憩室に運ぶを繰り返すこと三時間、パートの河合さんがきたので早引きさせてもらうことにした。でうちに運んでロッテあたりに記憶を消す魔法でもかけて貰おうと思ってうちに帰宅

「ただいまー・・・・ん~まだ帰ってきてないのか」
「はっ！？死ねえ！」
「そおいっ！」

そろそろ面倒になってきた俺はついあの禁断の技を使ってしまった、そうメロメロを。次にアルフが起きて殴りかかってきた時、使ってしまった。そして悲劇が起こった、狼になったアルフは俺を押し倒し顔を舐めまくり、嬉ションをした。

あの圧倒的敗北感、アルフを引き離し外に放り投げ、床を掃除して、風呂に入り、上がったときに血相を変えたフェイトがうちのドアを破壊して俺に杖を突きつけてきた。

「アルフはどこ！！」

俺は黙って外から窓をカリカリして鳴いているアルフを見やった。ぽかんとしているフェイトにことの次第（俺がアルフを殴り続けたのは端おって）を伝えたところ、今にいたる。

俺は気力を振り絞って立ち上がった。

「・・・あ」
「今、お茶の準備しますからそこに座っててください」

廊下で一度立ち止まり壊れたドアを見やって台所にはいった、面倒なことになった。やっぱり彼女は緑茶より紅茶のほうがいいのだろうか？

次回、対人最強の技はメロメロ！？

よくある十五話

とある日の深夜、八神家の台所に薄明かりが灯っていた。こそこそと冷蔵庫を開けてあるものを取り出す黒い影

「・・・ゴクリっ、いただきます」

黒い影が今まさに手に持ったものを食べようとしたその瞬間、パチッという音と同時に台所に電気がついた

「ん？お父様何を・・・まさか！」
「ア、アリア、待てこれにはわけが」
「その手に持っている蒟蒻ゼリーをこっちに渡してください」
「だ、だが」
「まったくそんなことといって蒟蒻ゼリーを喉に詰まらせたのは誰ですか？」
「うう」
「心配かけないでくださいよ」
「すまん」

グレアムの蒟蒻ゼリーはスタッフ（はやてとか）が美味しくいただきました

＋＋＋＋＋

結局はやてが帰ってくるまで俺は放心状態だった。でもそんな俺をはやては怒鳴りつけて玄関を直すよういって自分はフェイトに構い始めた。理不尽とも思ったが、はやて曰く、金髪幼女は萌えの王道、だそうだ。ならばしょうがない

「フェイトちゃんもアルフさんも泊まるやろ？」
「えっとその・・・」

そして帰ってきたはやてはフェイトとアルフと風呂が入りたいがために説得をしている。多分、人との関わりが薄いフェイトだと簡単に説得されてしまうだろうな。それにアルフが

「旦那～～！！」
「セイっ」

俺にべたべた引っ付いてくるのがな、困ったなもう俺はサンドかサンドパンしか愛せなくなってしまった（性的な意味で）故に顎に掠らせるようにカウンターを打ち込むしかない、赦せっ

「もう旦那ったら照れるなよ～」
「なん・・・だと・・・！？」
「あははは、慣れちゃった」

脳の揺れってなれるものなのだろうか？しかし現に数秒で復帰したからな、ここははっきり断るべきだな。変身を解いてと

「アルフ、俺はサンドパンっていうネズミだから狼であるお前とは、無理なんだよ」
「旦那・・・・」
「アルフ・・・」
「旦那、人になれるなら問題ないと思うけど」

あれ？俺がおかしいのかな、普通異種族は断り文句になりそうなんだが・・・やっぱり俺がおかしいのかな？

「アルフさーん！お風呂はいろー、フェイトちゃんも一緒だよ～」
「うん！わかったよ、入るから耳を引っ張らないでおくれ。あ、そうだ旦那も入らないか？」
「なに、旦那？へ～、ふ～～ん決め手はおっぱいやな！」
「いいから、さっさと入ってこい！」

どうやって諦めさせようか、やっぱりザッフィーにＮＴＲして貰うのが一番いいか

＋＋＋＋＋

風呂から上がってきたフェイト（絡んできたアルフとはやてはガン無視）に声を掛けて最初のようにテーブルを挟んで対面に座らせる。いろいろ考えた結果、このまま許しても彼女のためひいてはテスタロッサ家のためにならないと判断したからだ

「さっきの話しの続きだが、やはりフェイトの親御さんと話さないといけない」
「えっ、・・か、母さんは関係ありません！」
「いや親が子供の責任を取るのは当たり前だ、アルフ明日フェイトの親のところに連れて行ってくれ」

「・・・いいよ、あのババアにいいたい事があるんだ」
「アルフ！？」
「フェイト、私のせいでこんなことになってごめん。でもさ、フェイトが頑張ってるのに！あのババアは！」
「母さんの悪口はやめて！」
「フェイト！」

フェイトとアルフが口げんかをしだしたのでフェードアウト、フェイトの母親を責めるアルフと庇うフェイト、どっちも溜め込んでいたらしく段々とエスカレートしてるな。

母親からの愛に飢え、愛を得ようとしても叶わず、愛されていないのは自分が悪いと攻め続けるフェイト。フェイトを虐待する親に憎悪すら覚えてるアルフ、鏡合わせのような二人の意見は平行線を辿り続けた。

「旦那入れておくれ〜〜」グズッ
「いくら気まずいからって俺のところにくんなよ」

よくある十五話（後書き）

あ〜〜さっさとボルケン出したいな

あのですね、申し訳ないんですが春からの新生活でネット環境から遠ざかるんで更新は環境が整うかケイタイでするんで気長に待っててください

すみません

よくある十六話

夜、テレビを見ていたらはやてちゃんが、いきなり腹筋を始めた。隣で「んっ、んっ」といって腹筋をしているので画面に集中しにくい、ほんのり顔を上気させてひたすらトレーニングに励むはやてちゃん、本当に活動的になったものね。

「んっ、んっ、んはあ、んっふう。」

「・・・・。」

「んっ、んっ、んくっ、ぬふう。」

「・・・・・。」

なんかエロいわ、どれくらいかというとロリコンなら、即凝視するくらいエロい。はやてちゃんの今の格好は短パンにタンクトップ、白いおなかが出ていて扇情的、はっきりいってロッテよりも色気があるわね。

ほんとに足が治ってよかったわ

「んっ、あはん、うふん、んふ。」

「なんでこっち見てしてるのかしら」

「いやっ、アリアッ――！が連れるかとっ、おもてなっ？」

この子は何かとエロいことや性的なニュアンスを堂々といいだすから、困ったものね。親の顔が見てみたいわ。というかなんでいきなり腹筋をし始めたのかな。

「はやてちゃん。」

「んにゅ?んっ何、お風呂っ?」

「それはないわ、何でいきなり腹筋運動をはじめたの?」

はやてちゃんは腹筋を中断して、私を見る。荒げた息を整えて、汗を拭う色っぽいわね。そのあざといへそチラは何なのかしら、わざわざタンクトップで汗を拭わなくてもいいんじゃないかな。

「そか残念や、で私が腹筋してる理由やったな。それはある所に、両親を失った女の子がおってな、その子は下半身不随やて、でその子がある日。」

「ある日?」

「怪しい男にあってたん、でも人との会話に飢えていた女の子は、男を家に上げてしもて・・・。」

「・・・ごくりっ」

「という内容のスレを開いたら、腹筋スレで766回もの腹筋を要求されて現在に至る。」

元気な子ね。彼女曰く、自分と似た境遇やったから興奮して思わ

ず開いてしまったそうだ。本当に元気な子・・・。

＋＋＋＋＋

前回までのあらすじ、フェイトの使い魔であるアルフに襲撃された砂パンは、なかったこと（物理的に）にしようとしたが、妙に頑丈なアルフはどんどん硬く（性的な意味じゃなく）なっていった。

めんどくさくなった砂パンはロッテかアリアに、記憶を消して貰おうとアルフを説得（メロメロで）した。が効果がありすぎて野生の本能を刺激されたアルフに襲われてしまう（性的な意味で）その事後処理をして放心していた砂パンは、アルフを救出にきたフェイトをいじめてしまう。

翌日、すっかり元に戻った砂パンは、昨夜起きた事件（フェイトとアルフの喧嘩、原因は大人げない砂パン）をどうにかしようと画策、とりあえずフェイトの保護者にあってみようと思い立った。その結果が――

「くはっ、これ以上は体が持たないわ。アリシア・・・。」

「お母さん！？大丈夫！！」

「触らないで！！人形のくせに、アリシアの真似をしないで頂戴！」

これだよ。フェイトの実家にいったらいきなり母親のプレシアに「わたしの邪魔をしないで！」って半狂乱に攻撃されたんだよ。

彼女が得意とするのは、雷系魔法なので非常に相性が良く楽勝かと思ったが、戦闘構築力が異様に高く、オレが攻めきれない戦いに持ち込まれじり貧に、最後は彼女の体調悪化で終わった。

今目の前ではフェイトを罵倒するプレシアとそれを気にしないで、プレシアを治療しようと近づくフェイトの攻防が繰り広げられていた。

「わたしはね、あなたが大嫌いなのよ！！アリシアの顔で、アリシアの声で、わたしに話しかけるクローンであるあなたが憎いわ！」

「やめて母さん！無理しないで！」

なんかすごいネタバレしてるんだが、なんでフェイトは動揺していないんだ？あとついてきた、はやてがしたり顔なのがむかつくんだが・・・・。

「いたっ、なんで叩いたんや！」

「お前、フェイトに何したんだ？」

「んんとな、ツンデレという概念を教えたんや。昨日、アルフさんとの喧嘩やパン君との会話で精神的にまいってたから、事前にプレシアさんのことを聞いて、フェイトちゃんにプレシアさんの行動を一つ一つ、いかにツンデレであるかを解説してな。とりあえず、前向きにさせたらすっごいポジティブになったわけや。多分、いまフェイトちゃんにはプレシアさんの行動すべてが、ツンデレもとい愛しいものに映ってるはずや。」

「おまっ、それ洗脳・・・。」

そんなことを話しているうちにプレシアが気絶した。・・・・なんか蚊帳の外のなのはちゃんが可哀そうになってきた。

「ちょっとなのはちゃん迎えに行ってくるわ。」

「ん？どうやって」

「転移魔法、ものまねしといたからテレポ使えるサンドパンになりました。」

そかそか、いいながらはやては二人に近づいて行った。オレはプレシアをとっちめようとするアルフを羽交い絞めにしつつ、なだめつつ、迎えに行くことにした。

よくある十六話（後書き）

フェイトはヤンデレ属性を先天的に持ってると思う

よくある十七話

「やあ、ユーノ君。そこに座るといい。」

「はあ、何ですか。サンドパンさん、急に改まって」

「いやな、ちょっと聞きたいことがあってな。ユーノ君って人なんだろ。」

「そうですよ、それが何か？」

「ふむ・・・・・・何であの時、なのはの指を舐めたのか、知りたくてね。」

「それは・・・・。」

「いやいや、他意は無いんだよ？純粋に気になってね、淫獣君。」

「い、淫獣！？」

「フェレットであるのをいいことに、お風呂に一緒に入るのはどうかと思うんだよ、俺はね。な、淫獣君。」

「うわあああああーーー！！」

「どうしたの！？ユーノ君！」

「なのはっ！僕は人間だから！」

「えっ？・・・えええええーーー！！」

なんだがとてつもなく嫌な夢を見たユーノは、サンドパンにあった翌日、起き掛けになのはにカミングアウトした。

多少の混乱の後、なのはと距離が出来てしまったが、淫獣呼ばわりよりは全然増しだと、確信するユーノであった。

＋＋＋＋＋

一旦、家に帰ったオレはなのはに電話を掛けた。

「オッスオッス、ちょっといいか？」

『あれ、サンドパンさん？携帯の番号教えましたっけ？』

「ん、恭也から聞いた。今暇か？」

『お兄ちゃん・・・。えっと、今ですね。お父さんが監督をやってるサッカーチームの応援に来てるの。』

どうやら暇ではないらしいな、残念だが、なのはのライバルのお宅訪問はまた今度というわけだ。いや、残念だ。

『何か用があったんですか？』

「フェイト、なのはが負けた金髪の女の子な。その子の家にオレとはやてが、遊びに行ってるから、一人寂しく休日を過ごしているであろう、なのはを誘ってやるというオレの優しさ、どうよ？」

『えええーーー！？ちょっ！まっ！えええーーー！！・・・・あ、ごめんアリサちゃん。ちょっと、友達のお兄さんがっ――――――ちょっとあんたね！！なのはが変になった理由は！！』

「えっ？なのはってもともと変な子だろ、この前【魔法少女リリカルなのは、始まります】って鏡の前で呟いてたし・・・。」

『ブッーー！！アハハハハ、ククク、リリカルなのは・・・・ダメ無理！アハハハハハ！！』

なんだか向こう側が愉快なことになっているので、あっちに行くか、なのはの気配を追えば着くだろう。ちぇーんじ八神ライト！

＋＋＋＋＋

なのは達と合流した俺は、さんざんなのはに文句を言われながら、

翠屋へと場所を替えた。その際、とある少年がジュエルシードを持っていたので、恋愛相談の報酬として受け取った。余談ではあるが、少年は無事彼女ができたようだ。

「もう！ライトさんたらっ！あんなこと言わなくてもいいじゃない！」

「はいはい、儂のせい儂のせい。ほら、アリサ登録したいなら好きにしろ。」

「ぷぷっ、リリカルなのは。くっくっく、じゃあ期待して待ってます。なのはの、黒、歴ぷっ！あはははは！」

「いわないもん！絶対！二度と、いわないもん！あーー！すずかちゃんも笑ってる！」

「笑ってない笑ってない・・・くっ！こっち見ないで、ぷくく・・・。」

「笑ってるよ！思いっきり笑ってるよ！」

さて志郎さんがこっちを混ざりたそうに見ているが、これ以上は酷だろう。・・・・・手遅れかもしれんがな。――ピロリン

『今北産業！』

恭也からだ、なんだこいつ情報がはえーよ。どっかいってたんじゃねえのかよ、多分あそこで突っ伏してる桃子さんからだと思うが、なんか可哀そうになってきたな。

『なのはが
　魔法少女に
　　変身』

これでいいな、さてさすがに泣きそうになってるなのはを助けるか。

「じゃ、俺はフェイトの所に行くけど「お願いします、連れて行ってください。」見事な土下座だ。」

あまりにもスムーズに自然な土下座、いやDOGEZAだったために店内に沈黙が訪れた。なのはを小脇に抱えた俺は、ざわめく店内を尻目にフェイトの家に向かった。

＋＋＋＋＋

「・・・・・・。」

「なあ、なのはのそのリボンってどうやって結んでるんだ？」

「・・・傷心の女の子に対してそれはどうかと思うの。そこは慰めるところじゃないの！？」

「背負ってやってるからって調子に乗りやがって、明日の早朝訓練はＦコースだからな。」

「鬼なの！鬼がいるの！」

実はこの前、訓練（Ｆ、フリーランコースのことでとにかく走り回る訓練。）で足ががくがくになったなのはを背負って帰ったことがあって、その際におんぶが気に入ったらしい、そのとき「はじめてなの・・・」とか呟いていたが、気にしない。

――ピロリン

『キタ━━━━（；゜∀゜）＝3━━━━！！！』

「・・・・なのは、がんばれ」

「唐突になんなの！？」

よくある十七話（後書き）

なのはフルボッコ回、そして次から本格的な原作崩壊。
ストライクフリーダムはやて

例）ネガティブフェイト↓ポジティブフェイト
つまり一番原作を崩壊させるのは、すでに崩壊済みなはやてだったんだよ！ナ、ナンダッテーー！

よくある18話（前書き）

この小説は小ネタ、本編の順で書かれてます
創作意欲的に小ネタが先になります
ご容赦願います

よくある18話

オレのメル友はおかしい
―――ピロリン
『シュマゴラスを捕獲したわ！♀じゃなくて♂らしいけど、関係ないわよね！』

アリサからメールが来た。シュマゴラスってなんだ？ん、添付ファイルが・・・・・・なんだろうか、すごい禍々しいフォルムをしているけど、邪神とかそういう類いなんじゃないだろうか？あとあの作品は更新しないのだろうか？

―――ピロリン
『なのはが「Fコースまだかなー」って言ってるけど、なにかしたの？』

ユーノからのメールか。ふむ、特に何もしてないな。Fコースの後、ヒイヒイ言ってたくせにまたやりたいとか、あいつどMなんじゃないだろうか？いやまあ、うすうすと気づいてたさ、こっちの攻撃避けるそぶり見せないし、いっつも防御抜いた後、あいつ笑ってるしな。

―――ピロリン
『怖いなー怖いなー、ケーキ怖いわ―マジで』

ロッテか・・・・・・・しょうがない、怖いならロッテの分は俺が食べてやるとしよう。この翠屋のケーキが怖いんだからな、うん仕方ないさ。世の中こんなはずじゃないことばっかりだからな。

―――ピロリン

『美由紀のスカートめくるけど見に来る？今回は神速使うから成功するよ』

神速の無駄遣いだな、恭也のヤツ、大学に何しに行ってんだか、一般教養とか学んでないのか？とりあえず写めろと返しておくか、何かに使えるかもしれんしな。

―――ピロリン

『なんか恭也が変なメール送ってごめんなさいね。今教育するから、あと彼女なら喜んでパンチラしてくれるわよ』

おや忍さんからとは珍しい、というか恭也また失敗か。別に頼むほどのことじゃないじゃないけどな。

―――ピロリン

『そろそろ守護騎士の出番では？準備は整ってますよ。』

闇の書が焦れてきたな。・・・・・・いや待てよ、なんで俺のアドレス知ってんだよ。まあいいか、誕生日まで待てと返しておこう。

———ピロリン

『至急パンツ求む』

はやて・・・・・・もうなにもいうまい。

＋＋＋＋＋

「よっ！旦那、遅かったね。」

テレポートすると・・・・・アルフがいました。

「えっと、あなたは？」

「旦那の嫁だよ！アルフってんだ、よろしくな。」

「なんだアルフ、やに機嫌がいいじゃないか。」

なんかなのはが後ろで、お姉ちゃんに報告するの、と呟いているのが聞こえたが、それよりアルフの様子が気になるな。先ほどまでは、フェイトをちらちらみたり、プレシアを睨んでいたのにな。

「ふっふ~ん、それはね。フェイトと仲直りできたからさ！」

「あっそうなの、で？はやてたちはどこにいるんだ。」

「ひどっ！でもそこがいい・・・・・・フェイト達はプレシアを説得？中だよ。」

よくわからんが行ってみるとするか、はやての気配を辿ってと、結構奥まったところにいるな。

なんだか地下に進んでいくぞ？怪しげな臭いがプンプンするんだが、なんというかアレだな。悪の研究所とかそういう類いの怪しさだ。

見るからにヤバそうな部屋を何度か通り過ぎ、やっとはやての所に着いたのはいいんだが・・・。

「うっうっふぇいとぉ・・・・・。」

「大丈夫、大丈夫ですよ。」

「次は頭を抱きながら、耳元で囁くんやで」

どうなってるんだ？フェイトに縋り付いて泣いているプレシアに、座った状態でプレシアにおなかを抱きつかれて微笑んでいるフェイト、そしてフェイトになにやら吹き込んでいるはやて、あとカプセルの中にいる子供、とりあえずはやてが元凶なのはわかった。

さてどうしたものか、隣のなのはは現状を全くしらないし、アルフは俺の服の裾を掴んでいる。順に聞いていくか。

「なのは、感想は？」

「あ、ありのまま今起こったことを話すの！『私はフェイトちゃんの家に行ったと思ったら、そこは修羅場だった』な、何をいっているのか分からないと思うけど、私には何があったのかわからなかったの。頭がどうにかなりそうなの・・・。戦闘中とか、虐待とかそんなありきたりな展開なんて断じてないの。もっとカオスなものの片鱗を味わってるの。」

「にゃぁあああ！！私はそんなこと言わないの！」

「言ってるよ」

なのはに聞いたらユーノ（人間）が答えた。最近、ユーノはなのはをいじることが稀によくある。思春期だね、甘酸っぱいよ。

でもねおじさん、ここはシリアスな場面だと思うんだ・・・ネタとかそういうのいいから、ポルポル君のネタはもういいから、俺は二部が好きなんだよ。

っといけないな、ちょっと飛んでた。次はアルフに聞かないとな、アルフを見てみる。目があった、で頷いて・・・。

「目はつぶんなくていいから、状況を教えてくれ。」

「いけず、じゃあ1から説明するよ。あんたにやられたプレシアは半狂乱になりながら、この部屋に辿りついて、追ってきた私たちに罵声を浴びせてきたんだ。私は殴ってやろうと思ったんだけど、フェイトが私を手で制して「ありがとう、でもちょっと待って」っ

て言ってプレシアの近くに歩み寄ったんだ。」

「でフェイトが近づくと何故か後ずさるプレシア、このとき気づいたんだけどプレシアの足がプルプル震えてたんだ。そのあと何度かフェイトとプレシアが離したときに、あの子はやてが乱入していって、プレシアの耳元で囁いたと思ったら泣き始めてさ。」

「で今に至ると」

「そゆこと、でもいつまでやってんのかねぇ？」

さあな、気が済むまでやってればいいさ。落ち着くまで、待つとしようか。

よくある十九話

ある日の八神家

「今日こそ（おっぱい論争の）決着をつけようやないか！」

「黙れ青二才！貴様に（おっぱいの）何が分かる！」

今日もあの二人は元気ね。いつも大体エロ談議をしている二人だけど、たまにあああやって熱くなることがあるのよね。

「ええか！パン君、おっぱいは夢の塊なんや・・・あのすべてを包み込む柔らかな優しさ、なんでわからんのや！」

「これだから血気盛んな若いのはだめだな、いいか？おっぱいはただの身体的記号でしかなく、夢どころか最近では嘘を詰め込んだ虚乳なんてもんがあるんだぞ？」

「嘘のなにがあかんのや！それは優しい嘘やないか！・・・・・私は天然に限るけど」

「馬脚を現したな！だから貴様はアホなのだ！嘘は嘘！そもそもなんの努力も無しに美しさを得られるわけがない、だからこそ尊く美しいのだ！」

「わ、私は間違ってたんか・・・・・・・目先の欲に溺れて・・・・救いがたい・・・・・。」

「はやて・・・今のお前なら純粋に美しさを愛せるだろう・・・。」

「パン君・・・・・。」

おっぱいの話なんだけどね。なんでか知らないけど、はやてちゃんが突っかかる↓サンドパンが論破↓くさい演技というパターンが出来上がってるわね。

「さあ！第二ラウンドや！やっぱり巨乳が一番やろ！」

「愚か者、自分を見つめなおして来い。」

「無いからこそ有るのがええんや！あと揉み心地がええで！」

「ええで！じゃねえよ。」

こうやってはやてちゃんの変態教育がされていくのね。せめて犯罪だけは起こさないでほしいわ。

大体サンドパンが悪いのよ。なに語ってんのよ、エロの英才教育って誰得なの？

「ロッテ〜〜、一緒にお風呂はいろ〜。」

「もう一人で入れるでしょ。」

「あかん、足が治ってから誰も一緒に入ってくれんようになった。」

はやてちゃん、欲望に忠実なのは女性としてどうかと思うわ・・・はっ！今からレディとして色々教えたらなんとかなる・・・かな？

ロッテの挑戦が始まる！！

＋＋＋＋＋

『次元航行艦L級艦船第八番艦、通称アースラ及びハラオウン家の出番はなくなりました。』

今なにか聞こえたような気がしたが、気のせいだろうか？

「見ていてフェイト・・・アリシアの蘇生に繋がるならッッグハッ！」

「母さん頑張って！でも無理しないで」

「フェイトちゃん、なかなか無茶をいうの」
「フェイトちゃんは確信犯なんや、お母さんを信じてるからこそ無茶を言うんや。」
「確信犯？」
大型のコンピュータを操作しながら吐血するプレシアさん、その隣で応援したり吐いた血を拭いたり甲斐甲斐しく働くフェイト、魔法の練習をしながらはやてとオセロするなのは、知ったような口をきくはやて。頑張れプレシアさん、あなたの腕にいろいろかかってますんで。
「それでサンドパンさん、本当にプレシアさんの体とアリシアちゃんを蘇生する当てはあるの？」
「そうだよ旦那、フェイトを泣かせたらダメだからね。」
「大丈夫！パン君ならなんとかしてくれるで！」
勝手なことを言ってくれる。前回、なのはと戻ってきた俺は、開口一番はやてにアリシアを生き返らす術はないのかと聞かれ、多少は心当たりがあると言ってしまった。
いや本当に心当たりはあるんだけど、生き返らせられる奴は俺が前にいた世界、つまりポケモンの住む世界にいるから、まずそこが

どこにあるのかというのが大きな問題で、プレシアさんが頑張っている理由でもある。

「俺のいたところではこんな伝説が残っている。『塔の崩壊に舞い降りし聖鳥三つの魂を孵さん』ってな。」

「ピンポーーン！わかったで！ホウオウやな！」

「なんでホウオウなの？」

「塔はスズの塔ことで、三つの魂はエンテイ、ライコウ、スイクンのことや。ということは聖鳥はホウオウのことやんな、これテストにでるで！」

「何のテストだよ、これには続きがあってな『一つには塔に落ちし雷を　一つには塔を巻く炎を　一つには塔に降る雨を　与えん』という明らかに三体のポケモンを暗示させるがあるんだ。」

つまりあの世界ならではの信憑性があるというわけだ。

「見つけッカハッ！」

「母さん！大丈夫？」

「ふふふ、大丈夫。見つけたわよサンドパン！あなたの生体ルーツから逆算して、生まれた星をね！」

おおー、たった数時間で見つけるとは流石だな。正直見つからないと思ってたけど

「シャ！これでレッドさんとポケモンバトルができるんやな！」

「その前にバッジを集めないといけないの！」

「馬鹿だねー、スロットでポケモン集めだよ。」

全員間違っているけど、今日はもう遅いから明日改めて乗り込むとしますか。プレシアさんが虫の息でぶっ倒れてるし、さっきから恭也のメール（なのは何処？）がうざいし、なによりグレアムにも言ってないからな。

「久々の帰省かー、ワタル元気にしてるかな？あのパルパル野郎にも借りを返してやらないとな。」

よくある十九話（後書き）

砂パン故郷へ

よくある20話（前書き）

久々に書いたら色々とカオスな出来に
なんか7話くらいを思い出します
わたしなりにイイ話を目指したつもりです

よくある20話

『変態少女エロリストはやて　ＥＰ1～ぱんつの誓い』

八神家、和室。オレは部屋で、はやてと向かい合って正座している。俺たちの間にはピンクのぱんつ、これが今回の火種だ。はやては俯いてこっちを見ようとはしない。

「はやて、そこに座れ」

「はい・・・・。」

「俺がなんで怒ってるかは分かるな?言ってみろ」

「なのはちゃんのパンツを被ったからです・・・。」

「そうだ、過去にもオレのやロッテやアリアのを被ったのは身内だから許したが、今回のはやりすぎだ。わかるな?これは犯罪なんだ、妄想するのは構わないしオレのだったら気にしない、オレの言いたいことは分かるな?」

はやてなら正しい答えを出してくれるだろう、なぜならそう育てたからだ。ぱんつのはき方から、ぱんつの被り方、そして食べ方。オレの教育に間違いがあるはずがない、そうだろはやて。

「なのはちゃんのパンツは洗ってアイロンかけてリボンをつけて返します・・・。」

「そうだ。変態（パンツァー）というのは他人に迷惑を掛けずに暮らすものだ、今回はやては変態の道を踏み外して犯罪者になるところだった。はやて！心得を言ってみろ！」

座り込んだはやての手は固く己を恥じるように握りこまれていた。意を決したのか、顔をあげたはやては立ち上がり例のポーズになった。

「ひとーつ！自分に素直に！」
「ふたーつ！人の目に気をつけろ！」
「みーっつ！常に紳士たれ！」
「よーっつ！大胆かつ繊細に！」
「いーつつ！冤罪に気をつけろ！」
「むーっつ！変態に貴賎なし！」
「ななーつ！自分を見失うな！」

「お前はまだまだ幕内にも成れない序の口だ、でもな諦めなければ横綱になれるかもしれない。日々精進だぞ。」

「うん！分かったで！わたし、横綱になる！」

目の前で目を燃え上がらせているはやてがいる。なんとか更生できたようだ、これからも正しい紳士道を貫いてほしいものだ。

＋＋＋＋＋

わりと（プレシアが）ギリギリだったが無事にオレの第二の故郷ポケモンの世界へ着くことができた。

しかし着いて早々俺たちはとある問題に直面した。

「ぱるぱーる・・・ぱる！（まさか戻ってくるなんて・・・そんなに死にたいのか！）」

「な、なんや！？」

「っ！？敵意があるの！？」

オレを地球へ飛ばしたアイツ（パルキア）の存在である。こいつを何とかしなければ、目的を達成することも生きることすら危うい、よってオレは一切の自重を捨てて本気で潰しにかかることにする。

「よお、前はよくもまあ・・・やってくれたもんだな！！覚悟は出来てんだろうなア゛ア゛ア゛ア゛！！！」

「ぱっ、ぱる！？（な、なんだこのプレッシャーは！？）」

「こっわ！パン君、マジチンピラ」

勿論、オレは肉体強化技を積んでいる。久々のフルパワーでの戦闘に少し不安はあるが、まず目の前のパルキアを倒さないとな。

「ボーっとしてんじゃねえぞ！！」

「ぱるっ！（亜空切断！）」

オレは思いっきり跳躍してパルキアに迫る。だがオレに気圧されながらも見えない攻撃をしてきた。きっと一番頼れる、一番強いわざなんだろうな。事実、前は反応できなかった。でもな、二度も通用すると思うなよ。

「（ものまね）亜空切断！墜ちろ！カトンボ！（地球投げ）」

パルキアの亜空切断をものまねにして、パルキアの亜空切断を相殺、そして驚愕に固まったアイツを掴んで思いっきり地面に叩きつけた。地球投げはオレのレベル依存の固定ダメージつまり１００ダメージを与えたことになる。

ドコンッ！という音と一緒に地面が陥没して土煙が舞う、追撃をしようとしたが強烈な悪寒を感じ、様子をみる。

土煙が晴れ陥没した地面からパルキアが現れた。静かにしかし恐ろしい形相でこちらを睨みつけてくるが動かないのはなんでだ？・・・・・アイツの尾が不自然に濡れているということはアクアテールか？もしさっき突っ込んでいったらカウンターでアクアテールを

喰らっていたかもしれないな。

「ぱるぱる？ぱるるぱるぱる・・・ぱるぱる！（今のはなんだ？私の亜空切断をコピーするとは・・・生かしておけんな、亜空切断！）」

「当たるか！見え見えなんだよ、砂嵐！」

アイツのモーション無しタイムラグ無し見えないという厄介な攻撃を攻撃の始まる前段階で察知し、避けることができた。なぜ避けられるかというと毎回アイツは声に出して攻撃してくるからだ。

「ぱるる・・・（ぐぬぬ・・・。）」

更にアイツの亜空切断のＰＰ（使用可能回数）は5回、しかもだ、オレのプレッシャー（ＰＰの消費を倍にする特性）で2回しか使うことができない・・・・・・勝っｔ――

「ぱる！（重力！）」

「ガッ！な、なにが」

「ぱるぱる・・・ぱるぱるぱるぱる（砂が舞うなら落とせばいい・・・最初からこうすればよかったのだ。）」

ぐう、身体がミシミシいっていうことをきかない・・・アイツがこっちに近づいてくる。アイツの尾が濡れていて地面に水の道を作っている。

「ぱる！（アクアテール！）」

「ギエ！・・・ハア・・・ハア」

「ぱるるぱる（これで終わりだ、竜星群）」

堪えろ・・・オレは自分にそう言い聞かせて、空から迫る隕石を感じ取った。見る間に存在感を増すそれは、オレの命を狩り取ろうとする死神の一撃にも思えた。

オレよりも二回り以上大きい岩はそのままオレの体を圧し潰さんと墜ちてきた。

「ぱるぱるぱるるぱーる（終わったな、さてアイツが連れてきた人間たちを元の時空に戻さねば）」

「パ……パン君がヤムチャ！？」

「え、えええぇぇぇ！？そこなの！？そこを突っ込むんだ！」

「なのはも大概だよ、あれ死んだんじゃないかなあ？」

「あなた達って彼の何なの？」

「プレシアさん、大丈夫やこの小説はエロコメディやから」

「エロというよりも変態だな」

なんということだ。堪えるでＨＰ１でなんとか耐えてパルキアが油断したところを、美味しくいただこうと思ったのに、はやて達のオレの扱いが酷すぎて出てきてしまった。

「あっ、パン君や。」

「あ、生きてた。」

「ユーノ君・・・さっきから冷たい気がするの」

「貴方もよ」

「ぱっ・・・ぱる！？（なん・・・だと！？）」

「唯一まともなのはパルキアお前だけだよ。敵なのが残念だよ。ドラゴン2倍言いたいことはわかるな？竜星群！」

「母さん、準備できましたよって・・・・・・庭がめちゃくちゃ・・・。」

「フェイトフェイト！　ほら流れ星だよ！　旦那が折れますように×3」

よくある２１話（前書き）

今回はシリアスですよ（タブンネ

よくある21話

前回、パルキアを撃破&をしたオレ達はホウオウに会いにスズの塔を目指すことになった。

「うわあー、いい景色やなー。あっ！見て見てなのはちゃん、あそこにオニドリルが飛んでるで！」

「本当なの！中々のドリルっぷりなの！」

「母さん大丈夫？具合が悪くなったら言ってね。」

「大丈夫よフェイト、とても体調がいいわ。」

「旦那ー、あれは何？」

「あれはポケモンセンターだな、気をつけろよあそこに狙われたら最後、あまりの居心地の良さに野生に戻れなくなるからな。」

「ぱるぱるるう（なんでこんなことに・・・）」

「黙って飛べ」

「ぱる」

現在、俺たちはパルキアの背中に乗ってポケモン世界を空中遊覧

中である。なぜパルキアの背中に乗っているかというと、最初俺たちはカントー地方に降り立ってしまった。そのゆえ塔のあるジョウト地方まで魔法で飛んでいくととんでもなく時間と魔力がかかるためである。

「そういえばさ、此処の人って何食べてるの？」

「それやと食べられそうなんが限られそうやね。ケンタロスとかコダックとか」

「ポケモンかな？」

「なかなか愉快な話をしているが残念なことにポケモンはあまり食べられていないからな、普通に地球と同じような食用の生物がいる。そもそもポケモンは生態系の頂点ともいえるモンスターだ、早々に狩れるものではない。それに・・・・・。」

「それに？」

「いやなんでもない、それよりもそろそろ塔につくぞ。準備はいいな？」

いくつもの山を越え、（パルキアが）ひたすら西に飛びつづけようやく目的地であるスズの塔へとたどり着くことができた。ここまで乗せてくれたパルキアを労い、塔のある街へ降りる。

――パルキアは泣きながら帰って行った――

スズの塔のある町の名前はエンジュシティ・・・日本でいうと京都であり、なかなか趣きのある街並みをしている。

スズの塔はエンジュシティの管轄下に置かれ、エンジュのジムリーダーからバッジを貰わないと入れない仕組みになっている。

――ざわ・・・ざわ・・・ざわ――

「なんや分からんけど、すごい見られてる。」

「私たちっていうよりサンドパンさんが見られてるの」

――・・・もしかして赤毛さま？・・・――

――・・・最近行方不明だったあの赤毛さまなのか？・・・――

――ほら見ろ！赤毛様は死んだんじゃなくて修行に出てたんだよ！――

「旦那―、赤毛ってだれのこと？」

「俺だよ、見りゃ分かんだろ。」

「あー、そういえばパン君色違いやったね。」

「それより人が集まってきましたし、さっさと行きましょう。」

「ユーノ君の言うとおり離れた方がいいと思うの。」

「そうだな。」

ざわついた街並みを抜けて、街の奥にそびえる塔を目指して闊歩していく、途中トレーナーがバトルを仕掛けてきたが難なく撃退する。

そしてスズの塔の入り口に到着。

天を衝く塔は異様なまでの圧迫感を俺たちに与えた。

「だ、旦那・・・・・・これは一体!?」

「久しぶりだからって張り切ってんな。」

「どういうことや?」

『我　降臨』

塔の頂上から降り立ったホウオウの姿はオレを除くみんなの目をくぎ付けにする。日の光を受け七色に輝く羽の神々しさは見るものを圧倒し、明朗に響く声は我々に畏敬の念を抱かせるには十分なほど重く、そして涼やかであった。

『赤毛と人の子よ　このホウオウに何用ぞ』

「「「「「・・・・・・・・・。」」」」」

案の定ホウオウのプレッシャーに呑まれて反応出来なくなっているな。全くホウオウもこうなることを知っていて、プレッシャーをかけてくるからな。このおちゃめジジイめ。

「ホウオウもう気がすんだろ、そろそろ止めてやれ。」

『ふむ　人の子よ楽にするがよい　それでわざわざ此処にやってきた理由はなんぞ？』

「あ、貴方様が娘を甦らせることができると聞きやってきた次第です。お願いします！どうか娘を！娘を生き返らせてください！お願いします！わたしにできることなら何でも致しますから！」

ここぞとばかりに下手に出るプレシア、彼女のことをよく知るフェイトとアルフは目を見開いて驚いている。特にアルフは目をひん剥いている。

『よかろう』

「本当ですか！？」

『だが一つ問題があるぞ　それでもいいなら復活させてやろう』

「・・・・・・問題とはなんでしょうか？」

『うむ　そなたの娘がポケモンなる　それでもよいのならばな』

「なん・・・・・・だと・・・・・！？。」

どうするんだプレシア！

どうなるんだアリシア！

次回へ続く！！！！

よくある２１話（後書き）

人がポケモンになる前例としては
ユンゲラーですね

よくある22話

朝五時、喫茶翠屋にて

高町志郎の朝は早い今日も今日とて、朝一番にPCを起動させて
某巨大掲示板で糞スレを立てる仕事がはじまる。

「『ふええ、はたらきたくないよお』っと」
『またお前か』
『氏ね』
『働けおっさん』
『また奥さんにどやされるぞ？』

志郎がこのスレようなを立てて三日目、そろそろ新しいキャラを
考えないと皆に飽きられてしまうなと一人ごちつつ、返されるレス
を見てにやにやする中年が一人。

「『ふええ、おうちでごろごろしてたいよお』っと」
『結局新作のメニューはできたのか？』
「『うんとね　にがみのきいたもんぶらんつくったんだけど
　うちのひとにふひょうだったからまたこんどなの』っと」

あくまで・・・そうあくまでネタである。そう自分に言い聞かせ

て幼女になりきる志郎、しかしその顔にはだらしのない笑みが浮かび上がっていた。それはもう初めて子供（恭也）が生まれたときぐらいの弛みっぷりである。

それにしても寒気がするな、少し薬でも飲むか・・・・・・あっ、いかん水をこぼしてしまった。

「『ふええ、おくすりのもうとしたらおみずこぼしちゃったよう』っと」

『うえ、禿げたデブのおっさんがこんなこといってると思うと・・・・。』

「『うんとねGacktでおねがいしましゅ』」

『父さん・・・・・・そろそろ準備しないと』

『息子北――』

「あいたた、見つかったか『ふええ、むすこにおこられちゃったよう　そろそろ仕込みますんで落としといてください』」

高町志郎の朝は早い、愛妻家で有名な喫茶翠屋の主人はこうして日々のストレスを解消しているのだった。

＋＋＋＋＋

ホウオウの言葉を聴き、ごくりと喉を鳴らすとプレシアは召喚魔法でアリシアの入ったカプセルを取り出す。

こちらをチラッと見たプレシア・・・・まさかみんながみんなオレみたいなポケモンだと思っているのだろうか？だとしたらカイリキーとかになったら面白いことになりそうだ。

「・・・・・げる・・・・。」

『む？』

「どんなアリシアでも愛してあげるわ！さあ、甦らせて！」

『どんな姿でも　あい分かった　その意気や良し　括目せよ』

ホウオウがその虹色の羽を雄々しく広げると瞬く間に黄金に煌めく炎がアリシアの入っているカプセルを包んだ。その炎は勢いを増し、カプセルのすぐ傍に立っていたプレシアを巻き込んだ。

「キャーー！！」

「プ、プレシアさん！？」

「母さん！？・・・・・この鳥っ！」

「まあ、待て」

「離して！母さんがっ！死んじゃう！」

プレシア達に駆け寄ろうとした。フェイトとユーノを抑えて、炎が消えるのを待つ。それにしても、ざまあｗｗｗといいそうな表情のアルフは別として、聖なる炎だーとかいってるはやてとなのはちゃんは後で叱らないとダメだよな。

人としてリアクション取るところが間違えてるよ、いくらポケモンやってるからといってもせいなるほのおに回復効果なんてついてないんだからさ。プレシアの心配しようよ。

「あれ・・・熱くないわ？それどころかポカポカして気持ちいい・・・。」

「か、母さん大丈夫なの！？」

「落ち着けフェイト、ホウオウは破壊と再生の象徴、その聖なる炎は死者を甦らせると言われている。あれをオレも受けたことがあるが、聖なる炎は頭痛、肩こり、冷え症、皮膚病、炎症、骨折ｅｔｃ．万病に効くらしい」

「なんや温泉みたいな効能やなー」

「似たようなもんだな、そろそろ炎が消えるぞ。」

炎が消えるとカプセルのあったところには一つのたまごがあった。なるほどポケモンだもんな生まれるときはたまごか、プレシアは狼狽しているな。見ていて面白いくらいに、とりあえずプレシアにたまごを持たせて家に帰ることにする。

「アルフ、ここの座標は測定してあるよな？」

「勿論だよ旦那！あたしに言ってくれれば、いつでも此処に送ってあげるよ。」

「そうか。プレシア、そのたまご肌身離さず持ってろよ。その中にアリシアが入ってるから・・・・・タブンネ」

「そうなの？」

「じゃあ、ホウオウ今日は来てくれて感謝してるよ。また遊びにくるから、そん時はまたよろしくな。」

『赤毛よ　楽しみに待っているぞ　勿論今度は土産を持ってくることだな』

「ああ、とっておきの物を持ってくるさ。さ、皆帰るぞ。」

「「えーーー！観光はーー！！」」

「また今度、夏休みにでもな。」

ぶーぶー文句を言うはやてとなのはちゃんを諭しながら、アルフに時の庭園まで運んで貰う。プレシアとフェイトはたまごが気になってしょうがない様子で、微笑ましく思える。ユーノは――

「なにしてるんだ？」

「土のサンプルを、しかしポケモンだけではなくそこら中に生えている植物も面白いですね。特にアレなんて―――」

この星自体に興味を持っているようだ、確かにユーノのことだから探検とか、発掘とかしたいんだろうな。

さてやっとゆっくりできるな。

◇◆アリシア育児日記◆◇

5月5日、ポケモンというパンさんみたいなとんでもない生き物の住む世界から帰ってきた私たちは、早速私の姉・・・今後は妹となる人物アリシアなる女の子の環境づくりを始めた。

母さんにはたまごについていてもらい、私とアルフは手分けして庭園の整理を行う。まず私が取り掛かったのはアリシアの個室となる部屋の掃除だ。基本的に掃除のされていない庭園は汚く、スグに心が折れてしまった。私、掃除とかあんまりしたこと無いんだ。

「フェイトちゃん手伝いに来たよ！」

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃじゃーーん！！」

「はあ・・・・・・。」
「すみませんパンさんはやてちゃん・・・私たちじゃどうにもならなくて。」
「気にするな、フェイトとはやて、あとなのはちゃんは中をやってくれ。アルフ、お前には庭園の手入れの仕方を教えてやる。」
「じゃ、フェイトちゃんいこか？」
「うん」
「私はオマケなの！？」
「旦那ーー！」
「カウンター」

応援を呼んで正解だった。はやてちゃんは掃除のプロだと思う、まさか排水溝まで洗浄し始めるとは思いもよらなかった。とくにあのはやて棒という道具もすごいと思う、私もなのはも見習わないと。

一通り掃除を終えた私たちは休憩をとることにし、アルフ達にも声を掛けに行くとそこには綺麗な日本庭園がありました。一体、どう整備すれば石柱と瓦礫の山が松や竹林になるのでしょうか？

パンさんは最終的にこの時の庭園の外装も日本風に替えるつもりのようです。ますますあの人の謎が深まります。

５月６日、時の庭園が日本庭園になりました。今まであった武骨な石柱や岩が見事に木や砂利になっています。パンさんがいうには完成にはあと１００年は係るそうです。これ以上どこに手を入れるのかは私には分かりませんでした。

５月７日、家の一部が木造になってます。まあ、それは置いておいて遂にアリシアの部屋が完成しました。なのはやはやてちゃんは学校があるのでまだ来ませんが、パンさんは一度凝りだしたら止まらないのか、内装に取り掛かってます。この前テレビで見ましたが、アレが匠という人種なんでしょう。アルフが嬉しそうでなによりです。

５月８日、遂にアリシアが誕生しました。大きさは私より小さく５歳くらいに見えますね。これなら私が姉として振る舞うことが出来そうです。ただこの子しっぽが生えてるんですよね、パンさんは尻尾以外フェイトだから運が良かったと言っていました。

５月９日、アリシアに異変がっ！なぜか立派な角に大きな翼、太くてたくましい尻尾が生えていました。急いでパンさんを呼んでアリシアちゃんを見てもらうことにしました。するとパンさんはカイリュー？ポケセンに・・・いや無理だなと呟いて、アリシアを調べていました。パンさんが見たところ病気などではなく、そういう生態かもしれないので、どのような変化が起きたか記録するように言われました。

５月２０日、やっと最初の状態に戻りました。一時はどうなるかと・・・・・腕が４本になったときは流石にビックリしました。久しぶりにパンさんを呼んで、見てもらうとどうやら謎が解けたようです。

「フェイトが書いたこの変化を見ていくとこれらは全てポケモン

の尻尾だろう」

「ミュウの研究はあまり進んでいないが一説には全てのポケモンの祖と呼ばれ、全てのポケモンの遺伝子を持っているそうだ。この変化はそのせいだろう。」

「おそらくまだ自分でその性質をコントロール出来ないために、このような変化が起きているんだろうな。まあ、こうなったのはホウオウとプレシアのせいだがな。」

いまいちピンとこないけど、妹のアリシアはこれからも羽とかなんやらが生えるんだろうな。

5月21日、家が全部木造家屋になった。

よくある22話（後書き）

これを読んでいるか分かりませんけど
ドヤァ、アンケートの要望に全部答えましたよ

アリシアの見た目は大体萌もんと同じだと思って貰っていいです。
最初はゴーストタイプにして、砂パンだけ見破れるとかにしよう
とおもいましたけど、こっちの方がかわいいよね！

よくある23話

八神家居間。

いつもは賑やかなここは今日は閑散としており、とても静かであった。はやては自分しかいない自宅でぼーっとあたりめを咀嚼する。

「サイダーと珍味はあわんなー。」

そう口ではうそぶいてはいるが内心はやては悲しくなっていた。まるでパン君が来る前みたいや‐と。

このまま落ち込んでいてもしゃあないと、はやては腰を上げる。思わずどっこいしょといってしまった自分に苦笑しながら、さっきまで自分の食べていたものを片づける。

「パン君もなのはちゃんもアリサもすずかちゃんもオジサンたちもみんな用事があるなんてなー。」

わざと間延びした声を出して暫し思考してみる。友人たちはともかく自分の過保護な保護者達が急にそそくさと家を出て行ってしま

ったことに疑念を覚える。そこではやては足をみる

「うむうむ、今日もええ足や。」

確かに感じるパン君との繋がりに頬を緩ませてから、自分の体調じゃあないと思考の候補から外し、他の候補について考える。

皆が私のことを嫌いになる・・・う～んみんなのアイドルである私が嫌われる筈があらへん。

「いやでも・・・この前の全裸でブレイクダンスは皆にひかれたしなあ、少し自重した方がええかな。」

お次は実は私の知らない間に物凄い重大なことが起こっている・・・ぬ～んこれやとアリサやすずかちゃんが私のことを露骨に避ける意味が分からんし、いやちょっと前に・・・。

＋＋＋＋＋

そのころ時の庭園、大広間にて俺たちは今重大な問題を話し合っていた。それは――――

「さてはやての誕生日が来週に迫ったわけだが、いいかお前ら！はやての涙腺が崩壊するくらい盛大にパーリィーを開催するぞ！」

「「「おおおおお！！！」」」

「・・・ねえすずか、ここどこなの？」
「しっ、アリサちゃん空気呼んで」
「そうか・・・はやて君ももう9歳か・・・・・・・。」
「お父様・・・・・。」
「お父様もアリアもそんな辛気臭い顔してないで、準備するよ！」

はやての誕生日だ。オレが来るまでほとんど一人で過ごしていたはやては、こういう人情味溢れることをされると途端にいつもの調子を無くして焦りだすので、非常に可愛らしくて面白い。

このパーリィはまず主役であるはやて、主に準備を進める俺とユーノ、アリア、ロッテ、アルフ、アリシア、プレシア。それにはやてに誕生日を気づかせないための人員としてなのはとフェイト、アリサ、すずか。そして当日参加のグレアムの総勢１３人とかなりの規模となっている。

「おかーさーん、ふぇいと―見てー！」バサバサ
「はあ、今日のアリシアもかわいいわね・・・。」
「今日は・・・・・図鑑からするとプテラみたい、飛ぶのが好きなのかな？」

「・・・・・コイツラ・・・！」
「まあまあ、旦那ー、今が一番かわいい時なんだよ。あとは各自で準備すればいいんだろ？」

若干名話しを聞いてくれていなかったが今日はここでお開きとなった。

＋＋＋＋＋

～はやての回想～昨日

みんな私です。薄幸の美少女こと八神はやてです。最近、影が薄くなった？って砂パンに言われるけど、私は元気です。

この前は友達を諭したり（洗脳）、友達と二人がかりで友達のお母さんを説得したり、ポケモン世界に行ったり、いろいろあったけど。あれですな、世の中不思議なことがよーさんあってよろしい。

さてそんなことより最近なちょっと気になることがあんねんな。

「はやてちゃんって何か欲しいものとかあったりする？」
「お米券が欲しいな」
「えっと小物とかは？」
「ケフカはええと思うで」

「はやてー、あんた何か欲しいものある？」
「夢の国のネズミ」
「消されるわ！そうじゃなくてさ・・・ぬいぐるみとかあるでし

ょ。」
「夢の国のネズミの奴で」
「そこから離れなさいよ！」

「はやてちゃん。何か欲しいものってある？」
「すずかちゃん」
「えっと、ごめんね？それは無理かな。他に何かある？」
「ナチュラルにふられてもーた・・・。じゃあすずかちゃんのぱんつでいいです。」
「う〜〜ん。それなら「ごめんごめん！本気にせんといて！」」
まあ、なんやあれや。こいつら本当に隠す気あるんか？みんなして日替わりで、欲しいもの聞いてくるもんやから、私の誕生日があること思い出してもうた。

「こういうのはもっとひっそり準備するもんやないんかな？」

＋＋＋＋＋

はっ！？そうか誕生日か！あまりにも見え見えやってん、すっかり忘れとったわ。あかん、あかんは皆〜こういうんはもっと粛々と進めなあかんで、サプライズにならへんやん。
はやてがいろいろと悶えていると玄関の戸を開ける音がする。

「おう、はやて。」

「あ、パン君や・・・もう終わったん？」

「・・・あ～、よしちょっとこっち来い。」

はやてが意味ありげに問いかけるとパン君は少し頭を掻いた後、やっぱりなと呟きはやてを連れて二階に上がる。

次回、A's！みんな大好きヴォルケンリッター！

よくある23話（後書き）

ジュエルシードがまだ全部回収されてなくてもいいんじゃないかな

そう思い始めた今日この頃、しかしあれです。私の打っているあの子達がとてもひどいことになっていますが、ボルガ博士！お許しください！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4976r/

【昔のガチポケ】さいきょうの砂パン【今はネタポケ】

2011年12月28日01時51分発行